

[De POLA] 地方と都市を結ぶホットライン・マガジン

でぽら

7

'94秋冬号



特集

リターン・リターンのすすめ



特集 求めていた暮らしを実現 [Uターン、Iターン]のすすめ

■田舎に住みたいからIターン(長野県に移住した家族)

山が好き、スキーが好き。仕事も遊びも楽しくて忙しい——8

自然体でゆったり暮らす。「風を感じる作品をつくりたい」——9

自分のための自分の時間。やりたいことをやりたいだけやる——11

自然のふとこで半農半陶をめざす——12



■ふるさとへUターン(秋田県)

奥さんの実家へIターン——14

アグリエイターをめざして

「大野台グリーンファーム」で研修中——15

■Uターン公務員が町おこし村おこしの核に(青森県)

タブコピア「創遊村」——17

「少数精鋭」の一翼として——18

■北の大地にはロマンがある(北海道)

旅を愛する若者たちの宿

「トシカの宿」経営——26

ウソタンナイ川で「砂金採り」の指導員——27

野菜作りと趣味の生活——28

白い器、オケクラフトの工房経営——30

「何とかなるさ」の精神で陽気に(島根県)——31



でぼらとは

「でぼら」(DePOLA)とは Depopulated Local Authorities (人口が少ない地域)、つまり過疎地域の意味。わが国の過疎市町村は37%にも達しています。貴重な自然環境と農産物の供給地であり、日本の伝統文化や風土を伝承してきた農山村の活性化と発展をめざすための交流誌として「でぼら」をお届けいたします。

●表紙/石見町イン・アロマティックで働く都市からきた女性

【カラー・ルポ】

● 私たちも参加しています、ハーブの香る町づくり

(島根県石見町イン・アロマティック)——3

● 時代は建築技術者を求めている

(木材研究所・土佐人材養育センター)——20

● 私たちは北の輝く星〔カシオペア座〕——36



■でぼら・エッセイ

豊川への思い/立松和平——24

■都会からふるさとへのメッセージ

企業と地域の新しい関係を求めて
富士ゼロックス——33

INFORMATION(U・Iターン東京事務所他)——39、19他



ラベンダーの摘み取りをする“フリーエイティブスタッフ”



ハーブガーデンの前で

「フリーエイティブスタッフ」には「香賓館」と名づけられた快適な宿泊施設が用意され、週休2日。月々7万円が支給される。平成3年春、最初の募集では全国から70名に及ぶ応募があり、作文や書類選考などを経て、そ

島根県の静かな山里に、都会から6人の乙女たちが移り住んできた。平成3年春、島根県石見町はハーブの香る町づくりをめざして、小高い山の上に「香木の森公園」をオープンし、そのメインスタッフに全国から独身女性を募集した。

島根県石見町

いわみ

私たちも参加して、 ハーブの香る町づくり。

70名に及ぶ
応募者の中から

町が募集した女性たちとは、「フリーエイティブスタッフ」と呼ばれる6名の独身女性。一年間この石見町に滞在し、ハーブの栽培や、香木の森公園での作業に取り組みながら、都会では味わえない大自然の中でゆったりした暮らしを体験してもらおうというものだ。

これは石見町が打ち出した

「ゆとり体感・イン・アロマティック石見」という町づくりプランの一環で、都会の女性たちの若い感性を、町づくりにもっと活かそうではないかということから始まった。





ペンションのような“フリエイティブスタッフ”の宿舎“香賓館”



仕事を終えて、宿舎の前でくつろぐ



スイスの山小屋を思わせる香木の森公園内のクラフト館



ガラス温室の中には、セージやミントやローズマリーの苗がいっぱい

れらの中から6名の女性を選ばれた。現在は第二期生が滞在中。彼女らも同様に70名近い応募者の中から選ばれた6名である。

6月の終り。梅雨空の晴れ間を縫って、その彼女たちのある島根県のほぼ中央部、石見町を訪ねた。出雲空港からクルマで約2時間。フリエイティブスタッフ“6名の活動拠点は、ゆるやかな稜線を描く原山山麓の一角、5ヘクタールの山林を切り拓いた香木の森公園の中にあつた。

この公園は町づくりのシンボルとして造られたもので、ヨーロッパの田園を想わせる本格的なハーブガーデンや、温室クラフト館、レストラン、テニスコート、フィールドアスレチックなどを擁している。

この時期、ハーブガーデンはラベンダーの花盛り。仄かな香りが一面に広がって何とも爽やかだ。ここにはラベンダーの他、カモミール、ローズマリー、セージ、ミントなど240種、3500株のハーブが栽培されている。

このハーブを目当てに最近では県内ばかりでなく広島などからも観光客が訪れるようになったという。

カントリーライフにあこがれて

午前中の作業を終えて、スタッフの女性たちがクラフト館に集まってきた。作業用のブルーのユニフォームが若々しい彼女たちによく似合って、とてもチャームングだ。

“フリエイティブスタッフ”としての経験はまだ3カ月。今年の4月に移り住んできたばかりの彼女たちにとって、3カ月経った現在の心境は一体どんなものなのだろう。

木下純子さん(27歳)は福岡での銀行勤めを辞めてここへ来た。応募したキッカケは「農村生活をしながらゆとりの体験をしましよう」というキャッチフレーズに、心が動いたという。ちょうど都会の暮らしに少し疲れていて、のんびりしたかった時だった。

「体を動かす仕事がかんなに楽しいとは思わなかった」と笑顔を向ける木下さんは、今、自主研修で週に一度、近くの保育園にボランティアで働きに行っている。

大阪からやってきた下井草子さん(23歳)は「とにかく田舎暮らしにあこがれていた」という。農業にもハーブにも興味があつたし、家族の反対も特になく、迷うことなく応募したという一人だ。一年後にどうするかはまだ未定。今はただ新しい環境の中で好奇心を全開にして、意欲を燃やしている。

同じ大阪からやってきた中島尚子さん



↑ハーブの苗を鉢植えに植え替える別所さん(左)と坂上さん(右)



↑このナススタチュムは花も葉も食べられるんですよ、と中島さん
→「フリエイティブスタッフ」の良き相談相手、高橋さん
←先輩早川さんの指導で、ラベンダースティックを制作中



(23歳は、通勤に往復4時間もかかってたという大阪でのOL時代を振り返る。「プライベートな時間を無意味に過ごしていたようで、そんな生活を変えたかった」と、その動機を語ってくれた。今は気持ちの余裕も生まれてきて、週一度老人へのデイサービスのボランティアを楽しんでいる。

谷口昌代さん(23歳)は岡山県の出身。「親元を離れてみたかった」と、「自然が大好き」という二つの理由で、この暮らしを選んだ。自分たちの育てたハーブで工芸品を作り、それが売れていく。その行程の一つひとつに愛着を感じるという充実した日々を送っている。

鳥取出身の別所美さん(32歳)がめざすのは、より具体的なカントリーライフのノウハウの習得だ。出来ることならこの土地に住み続けたいし、そのためにはどうすれば良いのか。ハーブで自立するにはどの位の資金が必要なのか等、その姿勢には前向きで真摯なものが感じられる。「ハーブの勉強をもっとしたいし、町の

人ともっと沢山かかわっていきたく」と、意欲的だ。

坂上美香さん(26歳)は広島からやってきた。縫いのやクラフトなどの手仕事が好きだったが、今は自然の中での作業を楽しんでいる。「ここは人間も自然も本当にいいから」と、一年間の研修後もこの土地に残りたい考えだ。町のお祭りも楽しみのひとつ。週に二回、地区の子供たちにバレーボールを教えるなど、地域との交流も積極的に楽しんでいる。

若者たちには好評 Uターンのキッカケにも

それぞれに個性をもったこの6人のスタッフをまとめてるのが高橋美保子さんだ。肩書きは石見町役場農林課の主任主事。そもそも町づくりのテーマにハーブが選ばれたのは何故なのだろうか、高橋さんに訊いてみた。

「町長がとてもロマンティックな人でして、もともと植物やお香が大変興味をもっていたんです。それで最初は香木でやろうということだったんですが、樹木ですと時間がかかりすぎるので、草と木を合わせたハーブにしようということになった訳です」

ハーブでの町おこしに、地元の住民たちはどんな反応を示したのだろうか。

「最初の頃はハーブといっても馴染みがなくて、理解していただくのにやはり一年位の時間はかかりました。ただ若い人

→明るい柿本さんは職場の人気者

↓搾乳を終えてホッと一息の服部さん夫妻。犬の「パトラ」がいつも一緒だ



たちはとても興味をもってくれて、こう
した一連の動きには大変積極的な反応を
示してくれました。自分たちの生まれ育
った石見町を見直すキッカケになったと
いう事を聞きますし、Uターンしてきた
若者もいます」

この「ゆとり体感・イン・アロマテイ
ック石見」という事業は、石見町の壮大
な開発計画の中のひとつで、地域全体を
「定住ゾーン」「インフォメーションゾー
ン」「スポーツコミュニケーションゾー
ン」「アロマティックゾーン」と4つに分
けた構想のシンボリックな事業とし
て位置づけられている。

公園の敷地の中にはテニスコ
トやログハウス8棟も点在する。
都会からやってきた女性たちががい
きいきと働き、四季折々の花と香
りが楽しめる。ここは確かに町の
シンボルとなり得る要素をいくつ
ももった拠点として、地域に根づ
きはじめている。

石見町にそのまま移り住 んだ「一期生」たちもいて

平成3年春から一年間、この地
で「クリエイティブスタッフ」と
して過ごし、その後もここに住み
ついた女性が3名いる。

その一人早川信子さん(31歳)は
現在香木の森公園内のクラフト館
で、二期生たちの先輩としてクラ

フト指導などにたずさわっている。近く
に借家を借りての一人住みだ。

「ここに住み続けたいと思ったのは、何
よりも空気がきれいで、水もおいしくて
周りの人たちがとても暖かいんです。農
学部出身で、もともと植物が大好きだっ
たし、ハーブを使って作るクラフトの仕
事をもっと続けたかったというところが、
ここに残った理由でしょうか」

季節ごとに変わる山の色、夕方の空、
何気ない野の花、いくら見ても見飽きる
ことのない自然の美しさといつも謙虚に
向かい合っていきたいと、早川さん。

早川さんと同様、借家を借りて頑張っ
ているのが柿本安芸子さん(28歳)だ。現
在は隣の川本町役場にある「広域振興
財団」のスタッフとして活躍している。

小説家志望だったこともあり、企画や
広報の仕事が大好き。得意のワープロを
使って広報の編集などに取り組んでいる
毎日だ。陽焼けした健康的な笑顔できび
きびと働く柿本さんの存在は、町にも、
職場にもきつと爽やかな新風を巻き起
したことだろう。

「広島では楽しめないものが、ここには
沢山あるんです。星空が信じられない位
きれいなことや、大好きな神楽が観られ
ることなど、本当に沢山あります」

ここでの暮らしが如何に充実している
か、それらの全てを語ってくれているよ
うな柿本さんの笑顔だった。

そして今、とても幸せなのが、この春、

土地の男性と結
婚した服部茂美
さん(28歳)だ。

小さい頃から大
の動物好きだっ
た茂美さんは、

クリエイティブスタッフ
としての一年間、自主研修として近くの
酪農家へ手伝いに出かけることが何より
楽しみだった。その酪農家の青年が、今
のご主人・俊史さん(37歳)。出逢うべく
して出逢い、結ばれるべくして結ばれた
という感じのステキなお似合いのカップ
ルだ。

二人は今、30頭のホルスタインと馬の
「清姫」、二頭の山羊、ロバ、シエパード
犬「パトラ」、ニワトリ、猫という「大家
族」で暮らしている。

本格的な酪農の仕事は初めてという茂
美さんだが、もともと大の動物好き。生
きものたちの世話は全く苦にならないと
楽しそうだ。酪農の仕事も今はヘルパー
制度が普及してきて、ヘルパーを頼めば
好きな時に仕事を休むことが出来る。休
日にはカヌーに乗ったりドライブしたり
と、生活をエンジョイしている二人だ。

茂美さんのような「人生の出逢い」が
あったり、柿本さんや早川さんのような
それぞれの選択があったり、「ゆとり体
感・イン・アロマティック石見」の町づ
くり構想には、沢山の夢や可能性が幾重
にも潜んでいるようだ。

●撮影／プロフォトセンター ●文／金山淑子





Uター ン・Iター ンのすすめ

◆特集◆求めていた暮らしを実現



地方へ移住した人の動機・理由をみると、Uターン者では「家を継ぐ」「親の面倒をみるため」(30%)、「仕事の事情」(25%)が上位を占めており、Iターン者では「自然環境や気候」(24%)、「仕事の事情」(21%)などが決め手になっているが、「地方に魅力を感じて」(12%)、その他(14%)、「知人友人がいる」「土地が広く回りに家がない」等のさまざまな理由をあげている人が多い。(財団法人過疎地域問題調査会調べ)

年齢別にみると、「仕事の事情」や「親の面

倒を見る」をあげている人は22〜30歳未満の若い人に多く、「自然環境や気候」が地方へ移住した決め手とした人は30代以降の人に増えている。

理由、動機はさまざま、Uターン者、Iターン者ではかなり違いがあるが、引き金となった直接的理由は、Uターン者では地元に関する職業があった、Iターン者では「住居、土地など、田舎に住むための住環境が得られた」が、本誌の取材でも目立っている。

地方の「不便で閉鎖的」といったかつての

理由は減り、山村でも便利で快適な生活をエンジョイできると考える人が増えてきた。また、豊かな大地と自然環境があれば利便性は求めないと田舎暮らしを選択した人も多く、地方への移住は、「これから住みたい」という人を含めて確実に増えつつある。

それを受けて、各県でも東京や大阪等に、Uターン、Iターンの就職相談窓口を開設して、転職希望者のニーズに対応。また、地方の市町村でも、定住するための住宅の提供、転職費用の一部支援、事業をはじめの人への資金援助等、さまざまな制度を発足させている。

とくに、若者の大半を都市に吸収された東北地方は、U・Iターン対策に積極的で、東京事務所にはかつての4〜5倍のUターン希望者が訪れている。また、「ふれ愛信州、Iターン」をいち早く手がけてきた長野県には、都市から移住してきた人が、どの町村にも数人いて、田舎の人以上に「田舎暮らし」を実践しつつある。

一方、地方の企業は、都市の企業に比べてパブルの影響も少なく、景気の回復力も早い(経済企画庁「地域経済レポート」といわれており、「いまこそ秀れた人材を」と求人にも積極的だ。

本誌では、新しいライフスタイルを求めて地方で暮らす人々を、Iターンの多い長野県、北海道、Uターンでは青森・秋田県を中心に取材した。

- Uターン 出身市町村から就学・就職等のため都市に転出した後、当該出身地に再び戻ること。
- Jターン 出身市町村から就学・就職等のため都市に転出した後、当該出身都道府県内に戻ること。
- Iターン 都市出身者が、当該出身市町以外の市町村に転入し移住すること。



↑美麻村の一戸建村営住宅
→スキーが大好きでスキー場に就職した福山さん



長野県は、首都圏に比較的近いうえに、豊かな自然があり、田舎暮らし志向派に人気のある県。また、先端情報関連企業も多いため、求職希望者のニーズにも対応している。
『愛いっばいのふるさと、Iターン信州』をキャッチフレーズにしたIターン相談室には年間8000人の相談者が来所、全体の40%が東京などの都会からの移住希望者になっている。
自分の趣味や夢を信州で実現している家族4組取材した。(取材/さかいひろこ)

山が好き、スキーが好き 仕事も遊びも楽しくて忙しい 福山和之・京子さん夫妻(長野県美麻村)

好奇心の赴くまま、ちょこちょこ動き回る千夏ちゃんを追いかけけるのがゆっくりと慎重になってきた福山京子さん(31歳)。8月にふたりめの赤ちゃんが生まれる予定だ。

夫の和之さん(30歳)はスキー場を管理する株式会社大糸の観光課に勤務するサラリーマン。隣の白馬村の五龍・いもりゲレンデに毎日通勤しながら、四季を通じてゲレンデの管理に携わっている。

「スキー場で働いていると、冬、雪のあるシーズン中がいちばん忙しいから自分でスキーをする時間がとりにくい」という贅沢な悩みを抱えながら、休日には、スキー、スノーボード、釣り、山登り、そして一時間半かけて海まで行ってサーフィンと、遊びにも忙しい。今は妊娠中のため、留守番ばかりの京子さんと千夏ちゃんだが、ふたりめ

が生まれたらまたみんなでアウトドアを楽しみたいという。

「うちのおとうさんは、深入りしないで広くなんでもやりたいタイプかな」ともともと登山が縁で知り合ったふたり。和之さんは四国の徳島の出身で、京子さんは奈良の出身。

「結婚したらどこに住もうか」とまず捜し出したのが美麻村の隣、小谷村のもともと農家の空き家。

「半年でカメ虫に追い出されたんです。窓が真暗になるくらい大発生して。カメ虫の種類を全部見たぞっていうくらい、いろいろいたかな」

空き家だったとき、日当たりの良い家だったため大家さんがタバコの葉を干したからかもしれないなどの見解があったが、原因はよくわからない。

ふたつめは農家でしかも民宿をしていた大きな家。ふたりで住むには大き

過ぎた。トイレもいっぱいあって掃除が大変。家賃が3万5000円のおえ暖房費がかかりすぎるので一年で退出。とりあえず本社の裏にあった社宅で一年過ごした。

「ちょうど美麻村の村営住宅ができたのですぐ応募して。競争率も高かったしダメだと思ってたら当選したの。千夏も赤ちゃんだったし、きれいな家に住もうかという気持ちになってたんです。ここなら主人も通勤できるし、もちろん山も近いし、海へも日帰りで行ける」

ということで、美麻村に落ち着いて1年3カ月になる。

Iターンに住めるからと Iターンした人も

おしゃれな外観の一戸建て村営住宅は全部で16軒。庭先に菜園もついて家



賃は2万3000円という安さが魅力。人口1340人の美麻村が過疎対策として企画したこの村営住宅は、都会向けの新聞広告を出すと同時に応募が殺到した。Iターンを希望していた人の目に止まっただけでなく、「都会の土地の高騰で一戸建てを諦めていたが、住宅ローンを組んで四苦八苦せずに一戸建てに住める」とか「都会のアパートより安い」と家をきつかけにIターンを考えだした人もいるほどだ。まず家を応募しておいてから東京のIターン事務所に「職捜し」を訪れた人もいるくらい、美麻村の企画は大成功だった。中身に縦長に位置する美麻村は、大

町市への通勤も可能。「ハローワーク大町」の話では、隣の白馬村は大きな観光地を抱えているので、サービス業の求人もあるというから、美麻村に住んでのサラリーマン生活も十分可能といえる。

村営住宅に移住してきた人たちの中には今年から休耕田を借りて、稲作を始めた人たちが5、6人いる。もちろん自分で食べる米を作るためだが、農業で分らないことは村が指導もしてくれる。いずれば本格的な農業もやりたいという夢を持っている人もいる。村では村営住宅の第二弾も計画中。さらにIターン向けの宅地分譲も再来年にはスタートする予定だ。

「家の住み心地はいいし、美麻村自体いろいろな面で住みやすい村だと思えますよ。保育園にしても書類と条件さえそろえば入れてくれるし。村によってはなかなか保育園に入れないところもあるんです。それにこの住宅はみんなが村外からの移住者で、世代も近い人たちだから気楽な部分も多いですね」

という京子さんは、妊娠するまでは隣の村の託児所付きの会社まで働きに行っていたり、近隣の村にいちこち住んだ経験を生かして、情報収集のネットワークづくりもうまい。次の出産は千夏ちゃんがいっしょに泊まり込める病院、これも友人たちの情報から見つ

けることができた。

福山さん夫妻のように、若さを生かして明るく山間の生活を楽しむIターン組も増えている。

「この住宅の中で千夏と同じ年の子どもでも6人います。小学生から妊娠中も入れると30人弱の子どもがいます。さびしいとか不安だとかってあまりないです。他の村にも友達がいまますし」

自然体でゆったり暮らす 「風を感じる作品をつくりたい」 松尾レンゲさん(長野県信州新町)

「風戯」と書いて「かぜそばえ」と読むクラフト舎を作った松尾レンゲさん(38歳)はウッドデザイナー。信州新町の左右の山の中の空家を借りて住み始めてから13年になる。

兵庫県で生まれ育ち東京の美術大学では絵画を専攻していた。在学中に新聞記事で美麻村のアートセンター「遊学舎」のことを知り、そこで版画の助手を始めたのが木工との出会い。木を素材にした作品を作りたいという思いにかられ松本技術専門学校で本格的に木工を学んだ後、信州新町の山の中に工房を作った。

なによりすばらしい自然環境に恵まれ、山間の美麻村でのびのび暮らす福山さん一家。庭の菜園には50センチほどに育ったキュウリ、トマトなどが花を付け、ナスは小さな実を付けていた。トマトが真赤な実を付ける頃には、ふたりめの出産も予定されている。

松尾さんの作る楽しい動物たち



自然の再発見をテーマに家具や時計、照明器具、遊具など木を使っている。いろいろな手がけているが、「自然の中に暮らして感じて感じる風をオブジェで表現してみたい」というように、植物や動物をモチーフにし、風や、ふとした空気の流れて静かに動くように細工された作品が多い。

デパートで展示会を催したり、家具店に卸したり、個別の注文にも答えているがバブルの崩壊の影響はあった。アルバイトでログハウスの建築をすることもある。秋には一軒を全て任されるという仕事が入っている。ログのキットを組み立てていくのは、「巨大なオブジェを組み立てているようで楽しい」となんでも楽しんでしまうようなや

かさが松尾さんにはある。

奥さんは彫金、独立した工房で

「この暮らしはゆつたりしている。山の文化を吸収しながら、山の中でマイペースで生きていきたい」

という彼は奥さんと中学生の子どもの3人暮らし。彫金をしている奥さんとは遊学舎で知り合い、現在はお互いに独立した工房を持っている。

松尾さんが暮らす信州新町は北信に位置し、人口は7140人。本年度から新たにイターンUターン支援事業を本格的に展開することになった。イターン者への支援金制度、町内企業への

町内雇用促進事業、若者向け住宅の不足も含めた住宅問題への取組みなど、検討を重ねながら多角的に進めていく予定だという。

10年ほど前に空家暮らしがブームになった頃、信州新町にも空家を求めて住み始めた人がいたが、定着した人は結局ごくわずかだった。

「田舎のつきあいがいやだ」といって町の住人たちとの交流を無視し、草刈り、雪かきなど公的な作業にも協力しないなどお互いになじめず、トラブルも多かったため、町として空家の斡旋などは、それ以来やっていないという経緯がある。そういった過去の経緯を生かした新しい施策づくりに、松尾さ



ログハウス作りのベテランだが、住まいは廃屋を生かして

んのように町に溶け込んで暮らしてきた人の考え方は参考になるのではないだろうか。

廃屋に住む楽しみ

13年前、松尾さんは始めは農家の空家をかりて暮らし始め、一年後に近くの空家を買って住んでいる。母屋の隣の工房はすべて手作り。「もら

ったり拾ったりしてきた寄せ集めで」作り足した。「いい味出てるでしょ」というように独自の工夫や小細工があつたりして彼の作品のように見えていても楽しい。

「母屋のほうもね、ひまをみて少しずつ手を入れてるんだ。死にかけてた家を住むことで生き返らせていく、自分次第、想像力でどうにでもなるってところが、廃屋に住む楽しみだよ」

とはいえ、昨今の空家ブームには首を傾げたくなることも。

「空家を捜すのに完成されたものを望みすぎるんじゃないかな。初めからあるていど完成されたものを求めるんだつたら家を建てたほうが早い。そんなに金をかけたくないとか、安く住みたいけど、こんなに壊れているんじゃないや暮らせないっていうのはなにか勘違いしているよ。一時期ね、ブームにのって



不動産屋も空家のことに乗り出してきた、この辺でも住み始めた人がいたけど結局みんな出ていっちゃった。幻想だけを抱いていたんだね。でも自分で捜しに来て『できあいの快適さ』を求めずに住み着いた人たちもいるよ」

山に住みたい、空家を捜したいと思つたら自分でまずその土地を歩いてその人々と話してみることからはじめる。

「土地や家との相性ってあると思うんだ、人間関係は大切だよ。今は空家になつていくけれど壊すには忍びないと思われている古い家、何十年人々に守られてきた家を『任せてもいい』と大家さんに思ってもらえないとね」

その信頼関係が過疎の村に入り暮らし続けていくことにもつながっている。「僕なんかもう同化しちゃってすっかりここの人間になつてるから」

と笑う松尾さんは、地域の寄り合い

などにもしつかり顔を出してきた。
「そりや面倒なときもあるけど、慣れ
ちゃったよ」

13年間暮らしてきた彼の言葉に気負

いはなく、穏やかな説得力があった。
7月には工芸の仲間と「新しい空気と、
違う世界の刺激を求めて」30日間のア
メリカの旅に出かけていった。

自分のための自分の時間 やりたいことをやりたいだけやる 赤星静弥・淳子さん夫妻(長野県戸隠村)

イターン希望者に 宅地を分譲中

老後にイターンを考える人も少なく
ない。第二の人生のステージを求めて、
「ふるさと」を持ちたくて、と田舎へ
の移住を考えるひとも増えてきた。こ
の場合、仕事の利便性よりも、自然環
境など静かな住み心地にポイントを置
いた土地選びになる。

「定年前に会社を辞めて、山へいくぞ
っていったらね、この人すぐ『いこう、
いこう』って」

と笑うのは赤星静弥さん(57歳)淳
子さん(56歳)夫妻。神奈川県藤沢市
の自宅を処分して戸隠村に移住してか
ら、もうすぐ一年。山が好きで戸隠村
にはたびたび訪れ、馴染みになってい
たペンションのオーナーの紹介で現在
の土地を見つけた。開けすぎでない



ところが気に入った。

戸隠村は人口5760人。そばが名
物で観光地として有名だが、その観光
地とは別に、山村としての素朴なおも
むきを残す地区もあり、農業のみなら
ず長野市街まで車で30〜40分という距
離のため、サラリーマンとして通勤し
ている人も多い。自然環境に恵まれた
土地に住み、地方都市への通勤が可能
とあれば、第二の人生をという人たち
だけでなく、イターン希望者にとって
も魅力だ。

村では昨年宅地造成した区域の中に
イターン区画を設けるなどの対応をし
ている。ちなみにまだ空きがあるとい
う区画の値段は、1坪6万9500
円。一区画が平均105坪で、約72

0万円となっている。
他に公営住宅も二棟建築中で来年4
月には入居可能になる予定だ。所得制
限はあるものの、イターン者も入居で
きる。

娘たちには独立させて 戸隠村へ移住

「三人の娘たちにはね『私たちは山に
行くからおまえたちはアパートを借り
るなりなんなり独立しなさい。結婚し
たけりやしてもいいぞ』ってむりやり
独立させちゃった」

という自称「すごく恐いお父さん」
の静弥さんは、今という生粋の湘南ボ
ーイだった。海まで15分という自宅を
思い切って処分して、山に住むことを
選んだのは、自分の故郷が変貌し、故
郷が故郷でなくなっていくのをそれ以
上見ていたくなかったからだという。
「いつかは山の見えるところに」とい
う夢がある日突然実行に移し、まだ若
いうちに自分のための時間を自分のた
めに使う生活をはじめた。

「娘たちには、新しいふるさとをつく
ってやったぞっていつています」
ずっと雪を見ていたり、山を見てい
たり、ゆつたりと流れる時間のなかで
暇で困っている暇もないくらい、生き
生きと生活している。

静弥さんは今、燻製づくりに凝って
いる。淳子さんが土いじりに夢中の時





には、食事の支度を静弥さんがするほど、料理は好きで、しかも上手い。最近では週に一組のペースで来客があり、季節の山菜や燻製でもてなすのが楽しみのひとつになった。

「ペンションとか食べ物屋とかやる気にはならないのかっていわれるけど、商売じゃないからいいんだよね」と静弥さん。

淳子さんの趣味は、パッチワーク、鎌倉彫り、バラの栽培、そして漢字など、どれも素人の粋を超えている。

コンクールに出品したこともあるというバラ。居への荷物とは別の引越越し便を使ったというほど気を使って移植したバラたちもはじめての厳しい冬を越し可憐な花をつけ始めた。

パッチワークは形見にもらった古い着物を利用したタペストリーや、静弥さんのネクタイを繋いだクッションな

ど、淳子さんのアイデアとデザインに魅かれて教えてほしいという人が集まっている。

「木や花が好きでその字に興味を持ったのがきっかけ」という漢字は3年前から検定に挑戦し始め、昨年、漢字検定一級に合格したという実力の持ち主。ちなみに昨年の一級受験者は全国で1160人いて、合格者は57人でそのうち女性は10人弱という難関。平仮名だらけの取材ノートをそっと閉じた

くなった。

「やりたいことはたくさんあるんですけど、今はとにかく土をいじるのが楽しくて仕方がないの。雪の季節になったらパッチワークなどじっくりできますものね」

「朝、一時間かけて、ふたりで犬をつれて散歩するでしょ。道や畑にいる村の人たちに挨拶したり、立ち話して顔馴染みになっていく。野菜をもらったりすることもある。するとこっちゃんにも、

海の物が届いたときお裾分けしたりして、そうやって自然につきあいが広がっていくのは楽しいことだよ」と静弥さん。

わりやり独立させた娘さんのひとりが秋に結婚することになった。結婚までの2カ月ほどを一緒に暮らすため、もうすぐ新しいふるさとにやってくることになっている。

自然のふとところで半農半陶をめざす 井出克幸・千恵さん夫妻（長野県望月町）

新規就農事業で入植

井出克幸さん（35歳）千恵さん（35歳）夫妻が新規就農者として望月町に入植したのは4年前。同じ年に6世帯が望月町へ新規就農事業により入植している。

町の農業委員会の話によると、それぞれ高原野菜の栽培、養鶏などを手がけているが、5年目を迎えるに当たり、軌道にのせるまで、また継続していくためには、高いハードルがいくつかあり、新規就農の難しさに直面している人もいるという。農産物の価格の変動、自然環境・気候風土と自分が理想とす

る農業形態との相違、資金計画、労働力など、問題は多い。新しい販売ルート確保など、独自に取り組むことで成功している例もあり、広い意味での農業経営に関する情報と、資源と技術の連携が今後の農業の基礎になっていくということだった。

井出さん夫妻は、望月町の長者原で農業を営みながら焼きものをしている。1700坪の敷地には、ふたりの工房、母屋、その回りには畑が広がる。工房は克幸さんの手作りだ。他にはおみやげ業界で引き取り値の高い花豆200坪、池田町のハーブ加工場との契約栽培のカモミールが12





▲泥んこ遊びが好きな界ちゃん(右) 州ちゃん
▼味わい深い陶芸品の数々



00坪。他にリンゴやサクランボなどの果樹も手がけているが、労働力がい
ちばんの問題だという。

「一口に半農半陶といっても、まだ慣
れない農業はたいへんです。個展など
で留守にする間などの管理のこともあ
りますし。でもここでの暮らしは静か
でいいですよ」と千恵さん。

「作品づくりに集中できるのがいいで
すね。農業は少しずつ慣れながら、労
働力の不足をカバーできるような、効
率のいい生産を考えていきたい」と語
るのは克幸さん。陶芸の収入があるた
め生活に困ることはないが、農業を基
盤に乗せ、継続していくのはたいへん
だという。

子供は外で泥んこ遊び

四年の間に、界ちゃん(3歳)、州ちゃん(1歳)が生まれた。夫妻が工房に
いる間は外で泥んこ遊びをしたり、豊
かな自然のなかで遊び場にはことかか
ない。「たまに覗きにいきますが、車の
心配などはないし、横の小さな小川で
びしょぬれで遊んでいることもありま
す」というようにのびのび育っている
子供たちは、両親の制作現場もしっか
り見て吸収している。界ちゃんはろく
ろの前に座り、慣れた手つきで作品と
刃を持ち、ひとこと「けずりだよ」
もうひとつ驚いたことは、子供たち
が作業中の工房とギャラリーをちょこ

ちよこ歩き回りながら、あちこちよじ
上ったりもするのに、何一つ落として
割ったりしないのだ。

そそっかしい私などは写真を撮って
いるときも、自分がどこかに触って落
としはしないかとドキドキヒヤヒヤ。

それに引き替え子どもたちの大胆で伸
び伸びとしていることといったら、生
まれ育った環境のなせる技なのか。

「案外大丈夫なものですよ。割ること
もありませうけれどね。それは私たちに
もある失敗ですし、焼きものはワレモ
ノですからね」
と寛大なご両親のもとで、やきもの

の才能もしっかり育っているのだろう。
夫婦といえど陶芸に関しては、それ
ぞれの作風と個性を尊重し、余計な口
出しはせずに個展なども別に開く。

お隣さんが見えないくらい広い敷地
で、農業と子育ては協力しあいのんび
りと暮らす、穏やかな笑顔が印象的な
家族だった。

なお、人口1万1100人という望
月町は、小諸市、佐久市方面へ通勤可
能なことから、若者定住促進を図るた
め、町営住宅や宅地造成も手がけてい
る。

求人や田舎暮らしのための雑誌が人気



転職、就職希望者の約8割が求人雑誌等を参考にしてい
ることが労働省の調べでわかった。求人誌では週間発行
の「From A」「B-ing」「とらば一ゆ」「デューダ」などが
とくに若い人をターゲットにして人気があるが、地方への転
職や田舎暮らし志向者に注目されているのが『田舎暮らしの
本』(宝島社・月刊1500円)と、昨年創刊された『日経YOU
TURN』(日経事業出版社・季刊450円)。

『田舎暮らしの本』は、農業や趣味・技術(陶芸・クラフト
等)を生かして田舎暮らしをしたいという人に愛読され、「新
田舎人」を各地に取材している。農地・空家を含めた田舎の
不動産物件も豊富で、最近では田舎暮らしを成功するための仕
事、職業紹介にも力を入れている。☎03-3221-1998

『YOU TURN』は、地方企業の求人情報にポイントをおいて昨年7月に創刊。地方自治体のUターン施策、まちお
こしイベント、都市開発計画等にもふれ、地方の魅力や将来
性について情報提供している。☎03-5256-6921



奥さんの実家へI(U)ターン 樋口稔さん(秋田県鹿角市)

「Aターンプラザ秋田」東京事務所の紹介で樋口稔さん(38歳)一家を鹿角市に訪ねたのは、緑がまばゆいばかりに美しい6月のある日曜日。静かな郊外の住宅地の一角。通された居間で手入れのいきとどいた庭に見とれていると、二人の子供達と散歩に出かけていた稔さん、成子さん(37歳)夫妻が帰ってきた。

「日曜日に限らず、ここにきてからは毎日たっぷり散歩が楽しめて、子供達は風邪一つひかなくなりました」

有稀ちゃん(4歳)と顕友君(1歳)は地元の保育園に通っている。成子さん

もパートでドライブインの事務に通っているの、保育園へのお迎えは普段稔さんの日課だとか。

「会社まで車で5分なんです。いまは残業もほとんどないので、保育園の迎えがラクに出来るし、帰ってきてから夕食までの一、二時間も子供とたっぷり遊べるんです。東京にいた時は考えられないことでした」

樋口さんはコンピュータ関係の会社に勤めていたが、昨年3月に秋田県東京事務所「Aターンプラザ秋田」を訪ねて、鹿角市かその周辺都市に転職を申し込んだ。

いま東北各県が、首都圏にいる若者等に積極的にUターン、Iターンを呼びかけている。とくに秋田県では、U・I・Jのオールタウンに秋田県のAをかけた「Aターンプラザ秋田」をいち早く開設、転職希望者の対応に熱心に当たっている。

(取材/浅井登美子)

その理由は、奥さんの成子さんが二人姉妹の長女で、鹿角に住む両親との同居を希望したため。

「父が倒れて入院、母が介護に当たるといふ時期が半年ばかり続き、私も何度となく帰郷しました。今は元気になりましたが、将来のことを考えると不安だし、子供も田舎で健康的にのびやかに育てたいと思い、主人に無理を頼んでしまいました」と成子さん。

「僕は全然抵抗なかったですね。二人の子供を生む時も実家だったので、僕もよく来てましたから」

問題は、転職先。自分にあつた仕事があるか、待遇等はどうか。鹿角市がダメなら、とりあえず両親の住む家から車で一時間の場所を、と望んだ。

ところが半年近くで、Aターンプラザの骨折りで、鹿角市内の最大大手鉄工所(株)柳沢鉄工所のコンピュータ関係職員として採用されることになった。

鹿角市は、周辺に鉱山が多数あり、戦前戦後を通して鉱業のまちとして発展してきた。(株)柳沢鉄工所は社員90人のトップ企業で、樋口さんはここでコンピュータを生かした事務管理等のOA化を担っていくことになるが、現在では会社の事業内容や現場の概要につ

いて学ぶため、品質管理部で働いている。

「みんな親切で家庭的でとても働きやすい職場です。鉄工所といっても製造する製品もいろいろ、新しい分野の素材も開発しており、目下勉強中です。

苦勞するのは言葉ですね。だいぶ慣れてきましたが、いまでも秋田弁でやりとりしているとよく判らなくて……」

正月には好きなスケートが出来ると張り切ってスケート場へ行き、転倒して骨折という失敗もしてしまったと苦笑する。冬は、気温は低いが雪は少ないので暮らしやすい。

月給は東京時代に比べると安い、



娘と孫たちが帰ってきて何よりも嬉しいと、お母さん



トマトの出荷作業、一戸通男さん



トマトハウスで作業する田先さん(左)と須田さん



中居昭吾さん

社宅の家賃などを引くと手取りは同じ位になる。しかも鹿角の暮らしでは食費や交際費の出費も少なくてすむ。「3DKに住み、満員電車で二時間かけて通勤していたのが嘘のようです」

気管支の弱かった有稀ちゃんだが、ここへきてピタリと治った。大阪出身のため、農業については知らず関心もなかったが、これからはぼちぼち義父より家庭菜園や庭木の手入れ

れを勉強していきたいと樋口さんは語っていた。なお、鹿角市にはもう1人、「Aターンプラザ秋田」の紹介で、神奈川県の建設事務所を辞めて鉄工所に転職した

門間沢さん(33歳) 夫妻がおり、近くの小坂町や阿仁町にも電気技術者としてUターン、Jターンした若者などがある。

「アグリエイターをめざして」 「大野台グリーンファーム」で研修中(秋田県合川町)

田舎ヘーターン、Uターンする理由に、職業として農業をやりたいという人も多い。そのために、一定期間農業経営や技術を研修して、新規就業事業制度の適用を受けて農地を確保するという方法がとられている。

全国6位の農地を持つ秋田県では、「生まれ、アグリアドベンチャー」として新規就農者や農業経営者の育成に

力を入れている。現在9名が学ぶ秋田県農業担い手研修教育センター、大野台グリーンファーム(合川町)を訪ねてみた。

業研修生や農業指導員らの宿舍、体育館などがあり、目の前にはトマトや花き用のビニールハウスが約50棟。その奥には、牛舎、水田などがある。まさに「企業の経営感覚で農業を学ぶ」という方針にふさわしい舞台である。

秋田県の北部中央に広がる広大な丘陵地帯の一角は、秋田県が21世紀のテクノポリスとして開発を進めており、緑の中に工業団地がオープン(合川工業団地)、そこから数キロメートルのところに農業研修施設がある。

ここでは高校卒以上の学力を持つ18歳以上の若者が2年間研修する。一年目は農業の基礎的知識と技術をマスターし、二年目は、施設園芸、稲作、畜産など、自分のやりたい分野を専門的に学習する。研修生には月10万円の生活費が支給されるので、従来のような一大決意で望むといった切実感はなく、なかには奥さんと子供同伴できている人もある。

施設は、秋田県立営農大学校だった建物を活用して平成4年に開校した「秋田県農業担い手研修教育センター」と(有)大野台グリーンファーム。グリーンファームは、農家何戸かが参画して県の助成を受けて発足した。その農地で、研修生は農業実習する。広いセンターの敷地内には、新規農

自立的営農を学ぶ場
研修教育センター武石至範主席専門員にお話を伺ってみた。



秋田県農業担い手研修教育センターの寮(上)とグリーンハウスのハウスマン

その気があればやっていけると思いますが、まず体で覚えてもらうことです」

現在、今年入学した研修生が6名、二年目に入り専攻コースを学んでいる人が3名いる。

武石先生の案内で、所内を見学した。施設園芸として、カボチャ、ネギ、トマト、大根、アスパ

ラなどの野菜が約4・5㎡、バラ、ユリ、キク、シクラメン等の花きが2・4㎡、その外側には17㎡の水田・畑があり、水稲、枝豆、山ゴボウなどを栽培している。また、畜産部門では乳牛25頭を飼育している他、近郊の酪農家へ出かけて実習する。

今年入学した中で、まずユニークなのは、東京で舞台監督をしていた田先治秀さん(39歳)。

「10数年間メジャー、アングラまでいろいろ舞台をやってきて、長い間望んでいた農業をやるなら、いまが最後のチャンスかなと思って応募しました。将来は鹿角市あたりで野菜づくりをしたいと思っています。舞台の方も、落着いたらポチポチやりますよ。いま友達が公演するので頼まれて手伝ってお

り、土日曜日は東京へ行く機会が多くなっていきます」

田先さんとコンビを組んで野菜ハウスで作業していた須田貴史さん(19歳)は青森県西目屋村の農家の出身。

「専業農家として水稲+菌茸を大規模にやりたいと思っています。両親がまだ若いので、僕は秋田県のこの周辺で独立してやってみたいんです」とさわやかに語る。

一戸通男さん(33歳)は青森県出身だが非農家で、出版関係に勤めていた。奥さんと子供(2歳)がおり、合川町の町営住宅に入所して通っている。

「子供が嬉しそうに土で遊んでいるのを見て決心しました。妻もここで事務のパートをして働いています。有機栽培と養鶏をやるのが夢です」と語る。

その日は採れたてのトマトの箱詰め作業。

ここで採れたトマトは農業ゼロの完熟トマトで、一つ食べさせてもらったが懐かしいトマトの味がして大変おいしい。包装も簡素化、その日のうちに店頭に出すため、東京などへは出荷していない。

「農家でも働いてきましたが、生産者と消費者の顔の見える関係が大切ですよ」と語るのは、中居昭吾さん(25歳)。コンピュータ関係の仕事をしたあと農業をしたいと千葉県の農家で一年間働き、このセンターに応募した。安全で

備前雄二郎さん



おいしい野菜栽培をめざしており、すでに農業用地取得のプランもでき上っているようだ。

ハウス周辺の草刈りを汗だくになってやっていた若者、備前雄二郎さん(21歳)は、将来は花き専業農家が夢。家は酒造業で、田んぼや栗園もあるが、「農業の経験はゼロなので、結構体力がいることを実感しています。ここは水耕バラ栽培の先進地なので、大変いい勉強になりそうです」

研修カリキュラムを見せてもらったが、一口に農業理論といっても、土壌問題から、気候、農業、流通問題まで、学ぶことの多さに改めて驚く。実地研修の日は、朝8時半から午後5時15分まで、45分の昼休みがあるだけで、かなりハードなスケジュールだ。

しかしここで出会った青年たちの表情は明るく楽し気で、魅力的だ。こういう人達が、これからの山村のリーダーシップを担っていくことだろう。

●秋田県農業担い手研修教育センター
☎0186・78・3244

「毎年20〜30人の応募、問い合わせがあり、6〜7名を採用します。非農家の人が約半分、出身地は県内の人が約半分、首都圏からもかなり応募があります。高校を出てすぐやってきた若者もいますが、サラリーマンや自由業をやめようとしても農業をやりたいと研修生になった人も多くて、いろいろな人が一緒に学ぶ。これがいいようです」

今年3月卒業した一期生は東由利町でしいたけと野菜栽培をはじめたり、地元合川町で専業農家を後継している。

「農業に憧れて田舎暮らしをする人が増えていますが、農業で食べていくのは大変です。ここでは、最終的に企業的農業経営を学び、農業で食べていくようにすることをめざしています。受入れ市町村のお世話もしますので、

Uターン公務員が町おこし・村おこしの核に

(青森県田子町)

タプコピア「創遊村」はUターン青年が中心になって

最近、都市で就学・就職したあと、Uターンして地元の役場に勤める人が増えている。

もちろん「狭き門」だから、入所は簡単ではないが、文化施設、観光施設、あるいは老人ホーム等の新しい施設が次々にできるのに従い、その施設で働く若い人材が求められている。

一度地域を出て、離れて地元をしてみる、企業の発想、都市的感覚で見つめる。それが町村の活性化に新たな息吹きを与えるはずである。



古い民家を移築した「創遊村」

ここで働く若者たちの大半はUターンしたり、Jターンした人。開設に向けて専門家から研修を受けて指導員になった人もいるが、いまではその道の達人として腕前を上げ、その作品は土産品として人気を得ている人もいる。

訪ねた日は日曜日で、村内は親子連れの姿が多く、各館とも大盛況。

陶芸の家で働く三田章さん(26歳)は高校を出て上京、木工会社へ勤めていたが、帰ってこないかと誘いがあつたため帰郷した。

「長男なので、いずれUターンしたいと思っていました。大工は自信ありましたが陶芸は初めてなので独学で一生懸命勉強しました。一般客の体験コーナーには、ろくろをまわして焼き上げるコース、絵付けコースなどがあり、結構人気があります。やり甲斐のある楽しい仕事です」

地元の女性と結婚して2児の父親でもある。

「ねんりん館」で働く丹野貴治さん(25歳)は八戸市の出身。「子供が好きで、手先も器用な方だと思っていたの

で創遊村には大変興味がありました。いまの仕事に満足して「います」と語り、子供たちに木工教室を熱心に指導している。木工加工用の機器も完備している。大工としての技術よりも、誠実さ、明るさなどが求められているようだ。

(財)タプコピア事務局長の中沢一郎さん(36歳)もとは町外者だった。営林署職員で田子町に来ていた時、タプコピア構想の話を聞き、企画から参加して「創遊村」づくりを実現した。年間5万人が入場、小中学生の遠足や学習の場としても人気がある。

「開村後二年で、何とか軌道に乗ったという感じです。念願だった宿泊施設もオープンしたので大忙しですが、30人の職員で何とかやりくりして頑張っています。暇な時を利用して周辺の森の手入れや芝刈りの植栽等、土産品の包装等も手分けしてやっています。30人のうち、若い人は大半がUターン、Iターン者ですが、社会勉強してきた分だけ適応性があり、よく頑張ってくれます」

町役場の地域振興課副参事でもある中沢さんは、すてにすっかり田子町民。田子町の豊かな自然と特産品(田子牛・ニンニク)を生かした町づくりに燃えている。

●タプコピア創遊村/年末年始を除いて年中無休。 ☎0179・32・4344



タプコピア事務局長中沢さん

十和田湖の東南部にあり、ニンニクの里としても知られる田子町が(財)タプコピア「創遊村」をオープンしたのは2年前。

村には木工の家「ねんりん館」、陶芸の家「こねくり館」、手打ちそばの家「めんくい堂」、醸造の家「さんねん館」などがあり、入村者はこれらの施設で伝統工芸品づくりを見学したり、製作に参加することができる。

「少数精鋭」の一翼として 西目屋村役場のフレッシュマン(青森県)



かつては自然保護が生活優先(林道開設)かで揺れた村だが、いまは「ブナ林を生かそう」をキャッチフレーズにした村づくりが進められている。

ブナ林保護の呼びかけ人になった弘前大学の沢田教授が、「自然保護運動には役場の若い人が大変協力的です。彼等こそがこれからの村づくりと白神ブナ林保護の担い手です」と語っていたことがある。

西目屋村の役場職員は総定数55人。東京等の大学、専門学校で学んで帰郷した人を含めるとUターン職員は10数名になるといだが、今回は総務課で働く二人の青年に登場していただいた。

一年がとて短い

斉藤裕行さん(31歳)。東京の大学を出たが、健康を害して、内定していた就職を断念、その後弘前市で3年間自動車教習所の教官として働いたあと、Uターンして西目屋役場に勤めた。昨年4月から勤務、奥さんは大学病院の看護婦をしている。

「一般企業から入ると、役所というのはかなり違和感があります。企業だと会社の利益に向けて一生懸命に働くと

いう雰囲気ですが、役所の場合は多少のんびりしている感じです。

しかし、入所一年目だから先輩の下で見習いという甘えは許されず、一人ひとりがその業務のプロフェッショナルでなければならぬことと、村内のことや役所業務については一通り知っておく必要があります。

村長はよく「住民サービスを徹底してやること」少数精鋭主義で」と言い



左/三浦さん、右/斉藤さん

ます。何十年と役場勤めをしていると、自然に村内のことや各種手続きのことなど何でも知っている物知り博士になると思いますが、我々新米に課せられるのは、外部の視点で見て何が提案できるか、どうしていきたいかという意欲だろうと思います。

現在は総務課なので、住民と直接ふれあう機会は少ないのですが、トータルな視点で現状を把握し、将来像について考察できる場です。白神のブナについては、今後ますます国際的にも注目されていくと思いますので国際感覚を持った、開かれた村であると共に、住民がこの秀れた自然環境に愛着と誇りを持つことが大切かと思えます」と斉藤さんは淡々と語る。

健康面ではすつかり回復、日曜日には農良仕事を手伝うこともあるという。毎日やること、学ぶことが多く、若い人達との交流も盛ん。「ここにきて一年がすごく短かく感じます」と語っていた。
愛は強し/奥さんの里へ

三浦勝さん(33歳)は、いま役場で最も注目されている(?)新入生で、昨年5月に東京からIターンしてきた。

西目屋村(人口2220人)は、西部に白神山地を有し、津軽平野を潤す岩木川源流の村。秋田・青森両県にまたがる白神山地は、世界最大級のブナ原生林で、国も「森林生態保護地域」「自然環境保全地域」に指定、また、平成5年12月には「世界遺産条約」による世界の保全地区にも指定された。白神山地への登山口として知られる西目屋村では、貴重な資源であるブナをアピールするため、木にたずさわる宮民各界の15人が「ブナ林の保護・育成・活用」を目的にブナ植樹祭を実施、都会の人にも反響を呼び、毎年5月の植樹祭には1000名以上が来村する。

U、ターンの情報誌花ざかり

(各県の東京事務所)



福岡県ふる里人材Uターンコーナー 佐賀県東京事務所
 長崎県東京事務所 銀座熊本館 大分・豊の国Uターンコーナー
 宮崎県就職相談室 鹿児島県ふるさと人材相談室



山口県 東京事務所

島根県東京ふるさと雇用
 情報コーナー



広島県ふるさと就職情報コーナー

愛媛Uターン情報コーナー



香川県東京人材Uターンコーナー

長野県東京Uターン相談室



福井県Uターンセンター

群馬県Uターンコーナー

奥さんの実家が西目屋村で、4人姉妹の末っ子。「ぜひ戻ってきてほしい」と言う両親の希望で、私が転職を決意したんです。愛は強し、ですかね」とニコリ。

埼玉県富士見市出身。東京のコンピュータ会社のソフト部門で働いていたキャリアが望まれ、役場ではO.A化へ向けての準備を担当している。

「今は村のことをいろいろ勉強しながら、とりあえず総務課でO.A化の準備に力を入れています」

給与は、東京時代に比べると半分近

くになってしまったが、借家の家賃が5万円の他、生活費や見えない出費が多かったため、トータルではそれほどの違いはなさそう。東京では夫婦共働きて忙しかったが、奥さんは出産、家事などで当分専業主婦になる。

「西目屋村は風土がよく、人柄がよく、大変気に入っています。冬の寒さも思ったほどではなく、雪の暮らしを満喫しました。問題は言葉で、受話器を取るのにとまどいを感じた時もあります。が、やっとなれてきました」

いま役場内では、三浦さんの標準語

に影響を受け、標準語で話すのが流行っているとか。

埼玉に住む彼の両親も、定年後は弘前市あたりに住むのが希望だをうて、「いい物件があったら探しておいてくれ」と言っているという。

「小さな町や村では、一人ひとりの持つ重みは大きい。東京では人のためにとか地域のためにとか考えたこともありませんでした。何か一生懸命やれば、自分のためにも人のためにもなれると実感しているこの頃です」という三浦さんの言葉が印象的だった。



「ブナの里・白神館」と役場(右)

なお西目屋村では、今夏、温泉付き宿泊・交流施設「ブナの里・白神館」、清流と流れて知られる「暗門の滝」地区にキャンプ場がオープン。白神への玄関口としての整備が進んでいる。



カラー・ルポ

時代は建築技術者を求めている

「設計のできる大工」をめざして86名 (財)木材研究所土佐人材養育センター

アーキテクト・エンジニア

●ノミ・カンナを渡されて感動

日本の風土で育った木材を使い、伝統的な工法で作られた日本の木造建築。機能性と伝統美、木肌のぬくもり等が改めて注目され、人気を呼んでいるが、その技術者は年々減少している。

従来の伝統工法に、新しい技術をプラスした建築技術者を養成しようとして開設したのが高知県(財)木材研究所の土佐人材養育センター。平成3年4月、土佐町土居の廃校になった学校跡地を利用してスタートした。本館棟、学習棟、宿舎棟、野外実習場から成り、地元高知県嶺北地区の木材(杉、ひのき)をふんだんに使ったおしやれでぬくもりのある建物である。

研修生は、平成3年が9名、4年・5年が各30名、平成6年が17名。修業期間は一年間だが、二年以降も現場で働きながら、さらに、高度技術を磨こうという人が多く、一、二期生は関連のプロジェクト現場で、若くて優秀な大工さん達」として人気を博している。

研修生は高校卒業生が大半だが、中には短大、4年制大学卒業者もいる。応募は全国からあり、平成6年入学希望者の中には千葉県からきた女性もいる(取材の日は休んでいて会えなかったが……)。千頭喜英事務局長からお話を伺った。

土佐人材養育センター建物



森と川の美しいまち土佐町



「都会っ子が多くて、本当にみな素人。昨年は「初めて生きた牛を見た。牛を触ったら暖かった」という子がいて「神戸牛は冷たいからな」と冗談言ったことがある。木の節も知らない、差し金も、尺貫法も知らない。そんな子にカンナ、ノミを渡すと、みな目を輝



起床すると全員寮庭に出てラジオ体操



木の香りに満ちた食堂・談話室
寮田さんの作った朝食を食べる

午後は製図、設計の授業



かして感動するんですわ。実習している休憩時間も休まずノミヤカンナを研ぎ続けている子もいる。4分の1は、身内が建築関係の仕事をしています。ここで初めて大工道具を持つ子がほとんど。中には高所恐怖症のため建て前に出られない子もいるが、一年たつと結構立派な大工になりますよ。さら素晴らしいですわ」

●カリキュラムはびびり

全寮制で、一人一室ずつ、設備が完備した寮。7時半に起床して、朝礼、体操、朝食。

授業は8時半から始まり、夕方の5時まで。講義50分で休憩10分と、普通の学校より授業時間がかかり長い。

午前中は建築概論から施工・法

▶千頭事務局長



夢は「自分の家を建てること」 研修生の意見



夜は夜間照明付のグラウンドでナイター野球。地元の行事にもよく参加している

伊藤 豊さん(27歳)兵庫県西宮市出身
高知大人文学部 文学科 哲学専攻
5年いて1年職講師、計6年間大学に。
「最初哲学で食べようと思っていたのですが、大学の先生のポストがなくなりましたので、自分で物を作りたい願望がありました。自分で道具を使い家を造るのが



伊藤豊さん



規などの学科を主体に、午後は設計・製図と実技演習が中心のカリキュラムになっている。

授業時間が長いのは、生徒には企業から派遣されているというかたちがとられ、給料をもらいながら学ぶというシステムになっていることにもよる。月11万円が支給され、食費(月2万円)、その他を除いても手元に5万円は残る。

「給料もらってるから、勉強は仕事ぞ、と言ってるんです。建築法規などの授業は、実技と違って寝る生徒もいますので、「お前、稽をこいでいるのか」と言っちゃいます」と千頭事務局長はユーモアたっぷりに語る。

「家を作る原則は、手作り、手引き。機械はあるけれど、それに慣れてしまうと楽ばかりします。二期生の中に『頭が悪いから大工になろうと思ったのに、何でこんなに勉強しなアカんのか』と言った子がいますが、それは違います。大工の仕事は数学の知識などいろいろなことが必要です。ですから頭が悪いから来たいという子は断ります。

数々の教科をこなし、設計のできる大工、2級建築士をめざしています」

●木と人材を育て、 地域に活力を

千頭事務局長の案内で、森林組合の木材置場を見学した。太くて

真すぐな高級な杉、ひのきが沢山ある。

高知県嶺北地方は、先人達によって守り育ててきた杉・ひのきの美林地帯で、切り出し適性の杉が多い。この膨大な資源を地域産業発展に役立てていくためには、森林の育成、間伐、切り出し、加工、建築までを一貫して行うことで、国産材に付加価値を高めていくことが求められる。

「ここは杉にとっても相性がよく、樹齢300年以上の杉もあるんです。土佐産商が注文受注してプレスカットし加工する。切り出しも加工もいまはほとんど機械化されていますが、この秀れた木材を使って家を建てる大工が不足している。そこで(財)木材研究所が、木材の商品開発事業と人材育成事業に乗り出したわけです」

土佐町、本山町、大川村、本川村、大豊町の5町村と関係企業が運営。全国初の学校として注目され、年間1000人位が視察に来る。

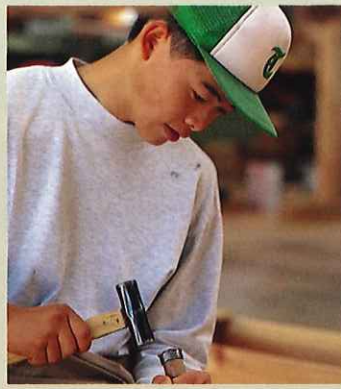
土佐町は高知市内から車で約1時間、杉の美林で覆われた山々と吉野川、早明浦ダムがある美しい町である。

●木材研究所土佐人材養育センター
☎0887-82-2008

夢で、設計から施工まで自分で全てして
みたかった。新聞記事でこのことを知
り、そのときは24歳でした。年齢制限ぎ
りぎりだったんで、これしかないと思っ
たんですよ。家族の反対はありませんで
した。

寮での共同生活は、大学時代にも体験
していたので慣れていました。むしろ生
活のリズムが決められていて楽だったで
すよ。仲間も沢山いたので(30名)部屋
に集まりワイワイやったりして。

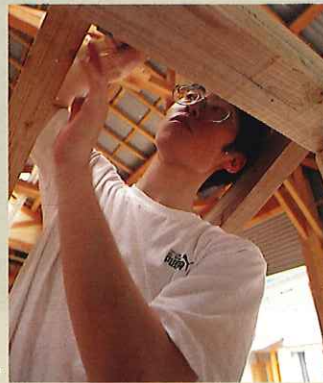
一番大変だったのは、ノミやカンナの
研ぎでした。これは本当に難しいです。
切れないで無理してやっていると歯が欠
けたりして失敗します。木と木の接ぎや
屋根の勾配を決めるのが難しいですね。」



北川勝彦さん(18歳)高知県出身→

「おやじは、会社勤めで大工と関係ない
んですが、勤めより物を作ってたんだ
です。設計のできる大工がいいんです。
早く1人前になって、つかい家を建てた
いですね。寮生活は楽しいですよ。でも
ここは、お店が少ないうえ7時にはもう
しまっていますから困るんですよ。将来
は、湖の近くに住みたい。サイクリング
が好きなので山道があるところがいいな」

北田純さん(18歳)千葉県大網市出身
「高校は、建築科だったんです。おやじ
も建築関係の仕事だったんで身近なも
のでした。ここは、学校の先生が見つけて
くれたんです。授業で、実技が他の人よ
り遅れていて残業や泊まり込みで作業も
しているんですよ。ここは千葉よりもの
んびりしていていいですね」

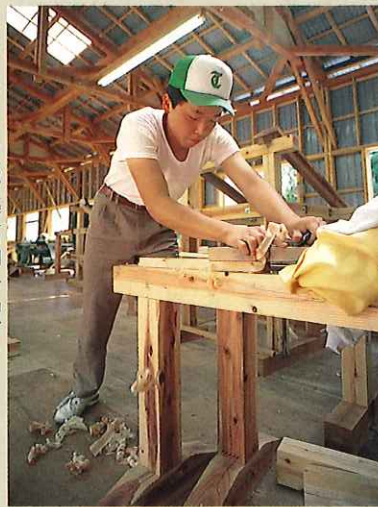


萩原延行さん(18歳)群馬県赤堀町出身→

「実はおやじも大工なんです。だから自
分も建築関係に進みたかった。ここは親
戚の人が教えてくれてパンフレットを取
り寄せたんです。普通大工になる人って
少ないじゃないですか。会社員は、会社
がつぶれたら大変ですけど、大工は手に
職があるからつぶしもききまずからいい
なと思ったんです。夢はいい仕事をして、
そこそお金を稼いで暮らして行きたい
です。自分の家を建てたいと言いたいと
ころですが、おやじが建てちゃったから
当分要らない。」

仲間もみんな明るくていい。この水
はおいしいですよ。手取りが4、5万円
なのでほとんど生活用品などで消えてし
まうけど、僕は群馬に帰省しなければな
らないのでお金を節約しています。

伊藤信哉さん(20歳)名古屋出身
「自分は、大器晩成型と自負している。
今なんでもうまいかと思っていけどこれか
芽が出るんじゃないかと思ってるんで
す。お父さんはモータースポーツを撮影
するカメラマンなんです。おじいさんが大工、カ
メラマンと違って儲かりそう。大工は技
術者で人出不足ですから。自分で柱を立
て家の骨組みができたときは一番うれ
しいです。でもやることすべてが初めてな
のでノコの引き方も全て難しい」



西尾 修さん(22歳)高知県出身→

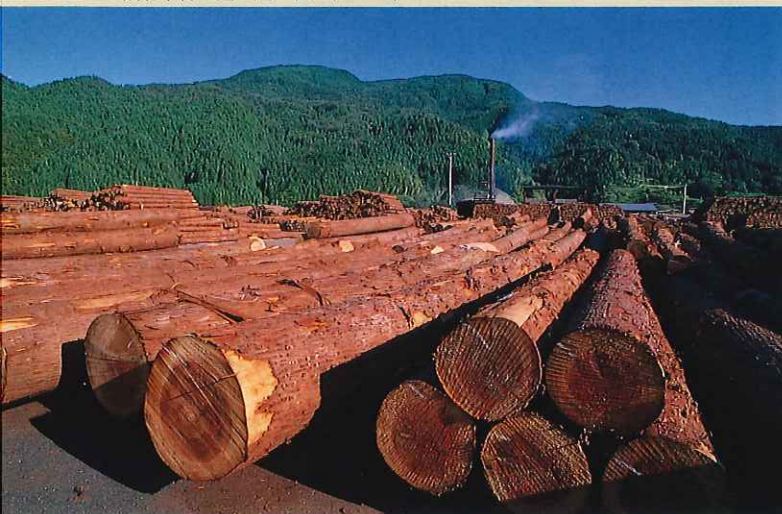


神岡秀治さん(18歳)愛媛県出身→

野村和正さん(18歳)高知県出身←



▼嶺北木材に運び込まれた杉の大木



なみなみと水をたたえる早明浦ダム(6月)





吉田川（郡上八幡）にて、立松和平氏

豊川への思い

とよがわ

あなたにとって一番大切な土地はどこかと尋ねられたとする。私にも好きな土地はたくさんあるが、最終的には自分の故郷が一番大切だ。今は異郷の暮らしをしているにせよ、やがて帰っていくのは故郷だと思っている。時折、私はそれぞれの故郷を愛する人から手紙をもらう。

「はじめてお手紙をします。失礼とは存じませんが、お願い申し上げます。

当新城市は、愛知県の最東端、静岡県との県境に位置し、人口三六、〇〇〇人で面積のほとんどが山林という小さな市です。」

その手紙はこう書き出されていた。市内を流れる豊川を舞台に毎年「いかだカーニバル」というイベントをしている。おのおの趣向をこらした手造りいかだで一・八キロの急流を下り、今年で七年をむかえ、一五〇以上の参加艇がある。暮らしの中心を流れる豊川で遊び親しむことによって、川の大切さを知ってほしいという趣旨のイベントである。

私への依頼は、そのプレイベントとして新城市にきて川の話をしてもらいたいというのだ。もちろん日程さえうまく折り合いがつけば、私に異存があるはずはない。

夏のある日、私は新幹線で豊橋に向かう。駅で迎える人と合流し、車で豊川を遡る。下

立松和平

流の汽水域は広い河原を持ち、人々の遊び場になっていた。土曜日なので、河原にはたくさん車の車がでている。

豊川は奥三河の川である。設楽町の段戸山の原生林に源を発し、約七七キロ流れて三河湾に注ぐ。上水道、農業用水、工業用水ばかりでなく、水運もになってきた働きものの川である。大切な川なのである。「いかだカーニバル」実行委員会メンバーの手紙はこうつづく。

「しかし、この東三河の母なる川『豊川』も、年々増加する家庭雑排水等によりその汚れが目だってきています。私も小さな頃よく水泳などの川遊びをしましたが、最近ではその頃見られなかった藻が生え、その汚れを感じています。」

日本中のたいていの川で同じような問題に直面している。川が汚れてくれば暮らしに困り、遊ぶ場所がなくなる。わかっていながら、私たちは生活雑排水を流して水を汚しているのである。

水を利用し、洪水を防ぐ先人の知恵

故郷の川が汚れたと危機意識を持っている人が運転する車に乗り、私は豊川を遡っていく。豊川は護岸堤や排水門がしっかりとつく

豊川の鮎滝
(撮影・立松和平)



られているとはいえ、姿のいい川である。堤防と流れの間には広い河原があり、畑などになっている。堤防の内側にはいたるところ竹藪が残っている。竹藪は根が堤防を保護する。水がでると、竹藪はその水を相当吸収し、堤防を越えようとする水の勢いを弱める。

このあたりの堤防には先人の知恵が生きている。鰲堤、あるいは霞堤と呼ばれ、ところどころ堤防が切つてある。これは洪水になると隙間から水が逆流して外にでるようにになっているのだ。水がでたところは畑で、水が肥料を供給するようになっていて、その畑には肥料をいれる必要がない。恐ろしい水とうまく付き合ってきたのだ。

現在ではもっとしっかりした堤防が築かれ、水量も減り、畑が水につかることもなくなった。そのために畑に肥料をやらねばならないのである。まくのはほとんどが化学肥料で、それがまた川に流れて汚れる原因になってしまう。

それでも豊川はまだまだいい川である。中流域で子供たちが泳いでいる。子供が泳げる川は日本では数少なくなくなってしまった。

新城のあたりにくると、豊川はますますよくなっていく。どこが汚れたのかと、昔の豊川のことを知らない私は思ってしまうのだ。昔はもっともっときれいな川だったのであろう。

桜淵公園は三河の嵐山と呼ばれている風情のあるところだ。岸边にはたく

さんの桜が植えられ、花見時にはそれは美しいことであろう。カヌーで遊んでいる人がいた。私も遊びたくなってくる。こんな遊び場が近くにあることがよい暮らしなのだ。

くる途中、いたるところに釣り人がいた。一本のいい川があるだけで、どんなに楽しい思いをすることができようか。だからこそ、川をきれいにしたいという人の思いはよくわかるのだ。

若鮎が滝を登る

公園の中にある料理屋で昼食をとった。鮎料理がなかなかの味であった。前日にとれた天然の鮎しか使わないのだという。

「父が川を船で案内したいと申し出ております。十五分ぐらい廻るといいですよ」

料理屋のおかみさんがいつてくれる。だが私たちは鮎滝を見にいづつもりになっていて、それも時間がぎりぎりなのであった。せっかくの厚意を辞退しなければならなかったのである。

「奥三河にもいいところがあるでしょう。こは水のきれいなところですよ」

自噴している泉だという鯉や鱒のいる池の前で、おかみさんはいう。豊川に近い井戸水を使った造り酒屋もこの近くにある。

鮎滝でなされている伝統漁法は、川の豊かさを前提としなければならぬ簡単なものである。長い竿の先についた網を狭い滝に向かって突きだしておく、廻上する鮎がどんどんはいってくる。鮎のほうで勝手に網の中に

はいるから、特別な技術が必要なふうにも見えない。こうして見ている間にも、鮎は何匹も滝の上に登っていく。初夏の若鮎である。

この鮎滝にはいわれがある。新城から上流一帯は三河材の産地である。山で伐採された丸太は、豊川に流されて下流に運ばれた。しかし、このあたりは滝の幅が狭く、丸太流材の障害になっていた。一六四三年滝川宗右衛門一貞という人物が、石工を使って滝を切開し幅をひろげた。これにより鮎の廻上も増えてきたという。領主は滝川家に「永代鮎滝元支配」の御墨付を与え、鮎滝での漁はこの地区の権利とされたのである。

こんな漁がまだつづいているのは豊川の生命力が保たれている証拠ではあるのだが、鮎は稚魚が放流されているのが現状なのである。また上流にダムをつくる計画が進行しているともいう。だからこそ川を守りたいという願いは切実なのである。

故郷は守らなければならないのである。帰ればいつも変わらずそこにあるという時代ではなくなってしまった。

みんな一生懸命だ。川への思いは、すなわち故郷への思いである。川を旅していると流域の人々の心の中がわかる。精神の中を旅していると同じことなのだ。

私は豊川がいつまでも美しく保たれますようにと祈る。

● たてまつ・わへい氏 作家・エッセイスト

北の大地にはロマンがある

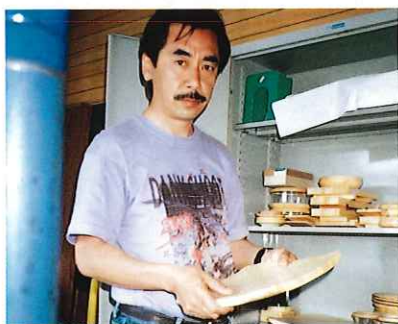
旅が好き、自然が好き。農業やウッドライフを志向する人にとって、北海道は限らない魅力の大地。北海道の北部地区で現実の厳しさを乗り越えて暮らす4人を訪問。(浅井登美子)



▲中川町ヘイタウン、野菜作りをする土居さん一家



▲「トシカの宿」の女主人・吉沼さん(左)
▼ウソタンナイ川の砂金採りを指導する北代さん(左)



▲オケクラフト工房を営む佐藤さん



「旅を愛する若者たちの宿」

「トシカの宿」経営・吉沼光子さん(北海道浜頓別町)

●一泊4000円、貧乏学生に

クツチャロ湖畔にほど近い民宿「トシカの宿」には、訪ねた日が土曜日という日もあって、我々を含めて8人が泊っていた。

砂金が出ることで有名なウソタンナイ川へもう8日間砂金採りに通っているという富山県立山市からきた青年、一カ月間かけて北海道の写真を撮り歩いている東京からきた若夫婦、無口なライダー、札幌から週末のドライブにやってきた青年と恋人。この二人は東京と大阪から赴任してきている。

「トシカの宿」は、北海道の魅力にとりつかれ、それぞれのスタイルで旅をしている人達が集まってくる不思議な宿だ。

第一に料金が安くて、一泊(食付で4000円。夕食はジンギスカン鍋料理で、お肉もご飯もお代り自由、食事のあとは手作りケーキと紅茶のサービスもある。

採算を度外視した料金を、経営者吉沼光子さん(45歳)は、「何とか私ひとりが食べていければいいんです」といって、もうずっと値上げしていない。

吉沼さんもかつて旅を愛し、北海道はもとより全国各地や外国を一人旅していた。その時の体験から、「貧乏学生でも安心して泊れる宿」普通の旅館にはない仲間との出会いや情報交換できる場」がほしいと願い、「トシカの宿」でそれを実現した。

お化粧もせずボーイッシュな雰囲気吉沼さんは、手際よくキビキビ働いて夕食の準備をする。しかし食事を終えてくつろぎの時間になると、客達の旅行の相談に乗ったり、旅の話に目を輝かす一人の女性になる。

「トシカの宿」には、北海道へ来たら必ず立ち寄るといふ常連客も多く、ライダー達からは、「一見大ざっぱそうだが細かいいところによく気がつく姉のような母のような存在」と言われている。

また、地元青年たちにとっても、「トシカの宿」はなくてはならない存在。宿が暇な冬の頃には地元の青年や夫婦たちの恰好の交流の場となり、酒を飲みながら吉沼さんと知的会話を楽しむ。

●田舎で育まれた知恵はすごい

吉沼さんは東京・大森の出身。七人



上から／冬は地元の若者の交流の場にもなる「トシカの宿」雪かきは宿泊客も協力して。出発前には女主人と記念撮影

兄弟の末っ子で、小さい頃は祖母と温泉や丹沢の山へよく出かけた。大学受験に失敗したのを機に、アルバイトしては旅に出るという生活を送るようになり、当然北海道へも何度かやってきた。その時「トシカの宿」を建設中の岸則夫さんと知り合い、吉沼さんもヘルパーとして手伝ったりした。
岸さんは横浜出身。浜頓別が気に入って、空家の民家を活用して、民宿を作ったが、のちにこの宿を吉沼さんに譲り、近くで養鶏業を営んでいる。
「儲からないけどやってみたいか」
スペインに8年いて帰国した吉沼さんにとって岸さんからの誘いはひとつのチャンスだった。しばらくヘルパーとして働いたあと、昭和59年に正式に「トシカの宿」を買い取った。

最初の数年間はとくに大変だった。自給自足をと畑も作ったが、寒冷地での畑は女手一つで片手間では無理だった。長い厳しい冬は雪かき、家の修理に加えて、孤独との闘いもある。
しかし、地元の青年たちや、口こみで訪ねてくれる若者たち、多くのヘルパーたちによって支えられた。
宿のリビングの一角に、沢山のアルバムが保管してあった。「トシカの宿」を訪れた人が、その時撮った写真などをお礼状と共に送ってくる。それがいつの間にか10数冊になっている。
それを見ると、吉沼さんが地元の人達と流水祭等の行事に積極的に参加する一方、ヘルパーが雪かきを手伝ったり、一般に敬遠されがちなライダー達も、ここでは楽しみにのびやかに過ごしているのがわかる。

浜頓別町（人口5356人）は、コハクチョウ等の野鳥が越冬することで知られるクツチャロ湖（ラムサール条約登録湿地指定）と、男たちのロマンをかき立てるウソタンナイ川の砂金採りが観光の目玉になっている。
「トシカの宿」に宿泊しながら毎日砂金採りに通っていた佐野幸一さんというライダー（エンジニア）の案内で、ウソタンナイ川へ出かけてみた。

「ウソタンナイ川で野営した青年は砂金採り」の人気指導員に 浜頓別町北代祐二さん

人工的に手を加えることなく大地の中をゆったりと流れる川は北海道特有の美しい風景だが、ウソタンナイ川の砂金採りが楽しめるあたりは、特に美しい。案内した佐野さんが、
「砂金を採るよりも、一日中川に入っ
て遊べる道内屈指の場所」といつていたが、この砂金採りの指導員、北代祐二さん（31歳）も、北海道へ旅した時には必ずここで一週間、二週間とテント

しているのがわかる。
「ここは田舎といっても因習的ではない、みんな心豊かでよく助け合います。土地の人は、自分たちのことを田舎モノと謙遜しますが、私たち都会生まれの人間は、結局一人では何もできない。田舎はいろいろなものを生み出す強い土地のことで、そこで育まれた知恵はすごいと思います」と吉沼さんは言う。
浜頓別の美しい自然に魅せられてインターンしてきた青年の何人かは、北の国で定職を持って生活し続けることの困難さを知って引き上げていった。
また、最近ではリッチな若者が多くな

り、夏休みなどにヘルパーとして働いてくれる人を探すのが結構大変だという。近くには国民宿舎もあるため、制約（寝室では禁煙、アルコールを禁止）のある「トシカの宿」を嫌う傾向もあるようだ。
「少し体力が落ちたせいかわ、これからもずっとやっていけるか不安に思うところがあります」と、ぼつりホンネをもらしながら、「でもここにはかけがえない大自然がありますから」と言って、吉沼さんは、台所へ立っていった。
●「トシカの宿」
☎01634・2・2836



▲ウソタンナイ川



指導員・北代祐二さん

を張って過ごしたというライダーの一人だった。

同川の上流にはかつて砂金採りした鉱山があったが戦後間もなく閉山。その後は鉱山で働いていた老人たちが趣味でウソタンナイ川に入っては砂金採りを続けてきた。一攫千金を夢みる(?)マニア達もよく訪れることから、町では川原周辺を公園として整備し、休憩室&砂金資料館「ゴールドハウス」を開設、入場料500円で砂金採りに必要な用具一式を貸し出している。

町が指導員として白羽の矢を立てたのが北代さん。まだ訪れる人が少ない頃テントを張って一カ月もいる若者に町の人が興味を持ち、酒を持ってテントを訪ねてきたという。それが縁で、以前から砂金採りの指導をやっていた老人が死去したのを機に北代さんが指導員を後継することになった。肩

書きは町役場の商工観光課公園管理係。待遇的には嘱託職員。すでに3年たつ。

6月から10月までは砂金採りの指導員をしているが、多い日は100人以上上るので、一日中入って腰をかがめての動作は結構きつい。その分冬は少しのんびりして、用具類の手入れや製造、流水祭の準備等をしている。

「僕がかつてミツバチ族で、冬期半年間は愛知県でアルバイトして働き、あとの半年はバイクなどで全国を旅していました。ウソタンナイ川では、お世話になっている人に土産を買う金がないから、せめてのお礼やら土産に砂金でもあげようと思いついたのが始まり。ここは最高にいい町ですが、前のように好きな旅行ができないのが残念ですね」

高知県出身。将来は高知県へ帰り、

足摺岬あたりで農業をやりたいと思っていた。

「家賃7000円の町営住宅に入っていますので、生活面は何とかなりますが、ずっと自由に生きていたせいか、組織の一員としてそれなりに無難に働くという役所の体質にはちよつとなじめなくて…」

北代さんの指導員としての人気は高く、イベント等の企画にも個性的なせ

北海道で野菜作りと趣味の生活 土居守さん一家(中川町)

●父さんの 「畑仕事をやるぞ」宣言

中川町の市街地の一角に、土居さん一家の住むモダンな新住宅が目目をひく。北海道地図を形どった中に書かれた守、雅子、堅吾の3人の名前。脇にはもう一つ「土居鍼灸院」の看板もある。

大阪在住の土居さん一家が北の大地、中川町へ入村したのは平成2年の4月のこと。翌年には、ここに永住して農業をやることを決意し、家屋を早々に新築してしまった。

なぜ北海道へ移住することになった

ンスが光る。町の人は「結婚でもしてこの町にずっと落着いてほしい」と望み、本人もそう思うこの頃ではあるが、対象となる若い女性が少ないのが現状だ。

●問い合わせは浜頓別町役場 ☎0163 4・2・2345 商工観光課へ。なお、ゴールドハウスでは、砂金や鉱山に関する資料などを展示している他、川へ入らない人用に「砂金プール」もある。

のか、奥さんの雅子さんはこう語る。

「主人は南海電鉄に勤めるサラリーマンだったんですが、自宅の家を売ったためちよつとまとまったお金が入った。そしたら『よし、どっかへ行って畑仕事するぞ』と言いついたんです。前から田舎での畑仕事を夢みていましたし、一度いい出したらきかないことを知っていますので、どこかに受入れてくれる町村があるか、私が片はしから電話していったんです。

北海道庁へ電話したら、各市町村へ問い合わせる言われたため、南の方から順番に電話していったんです。殆どの町が、畑仕事なんかで素人が食

べていくのはムリ。『農業をやるうなんて真面目に考えているのか』といった具合で、本気に相手をしてくれませんが、そんな中で中川町だけが真面目に対応してくれ、一度見に来たらとってくれました」

丁度北海道では新規就農事業に力を入れ出した頃で、中川町でも5人の就農希望者を受け入れたが、道や町が予定しているのは酪農であって、野菜作りを希望する人はいなかった。幸い、後継者がいないため農業をやめたいと



町内の一角に宅地も確保した。町の中心部に近いが、裏手にはうっそうとした原生林もあるいい場所だ。そこで冬が終るのを待って早速家を建てる準備をはじめたところ、町長があわててとんできて「早まるな」「早まるな」と制したと、二人は笑って語る。

「ここでは野菜農家では食べていけない。やがて子供も出ていってしまう。もう一度ゆつくり考えた方がいいと町長は親切に言ってくれたんですが、私

●収穫した野菜は消費者にも大好評

いう佐藤さんが研修を引き受けてくれたため、家族3人中川町に引っ越してきた。堅吾君は小学校6年生。研修期間の二年間は駅前農協の社宅に住んだ。

町の斡旋で畑16町歩を購入した。将来息子と二人で本格的に営農するためには広いほうがいいだろうと思ったが、実際には現在3町歩しか耕作しておらず、空地は推肥用にと牧草にしている。

「最初からこうしたいという計画があつて来たというより、試行錯誤しているうちにこうなつてしまつたんです」とご主人の守さん(47歳)は言う。

たちは食べていくつもりで覚悟してきただけだからね、母さん」

「そうなんですよね、父さん」

農地購入費や機械購入費で約2000万円、家の新築費に約2500万円使った。畑は車で10分ほど行った場所であり、ご主人は朝食を終えたと早々と畑仕事に行き、昼食に戻ってきてしばらく休憩したあとまた出かけていく。体も健康、たくましくなった。

「私も最初は手伝つたんですが、男の人は機械だけれど、細かい仕事は女の子の手作業で、これが重労働。昔からやり慣れていないので体調をくずしてしまひまして」と稚子さん。

そのため、家の前にビニールハウスを作り、そこでバラなどの花きを植えたり、トマト、キュウリ等の家庭菜園を楽しむ程度にした。

農協等の指導もあつて、土居さんの有機栽培野菜は、昨年、とうもろこし(加工用)1町歩、じゃがいも3反歩、かぼちや3反歩、ごぼう3反歩、長いも4反歩とかなり本格的で、これらは主として個人の人に直販する方法をとつた。

ところが購入した人から「とてもおいしい」と大好評。もつと欲しいと追加注文も多く、在庫もゼロになったほど。

「といっても農業収入はまだ100万円ほどで、儲けにはなりません。消費者の人から沢山のお礼状などが届い

●地域の人に頼まれて鍼灸院を開設

て、やる気が出てきました。息子も高校を出たら手伝うと言っています」

稚子さんは鍼灸師の免許を持ち、大阪では15年間開院してきたベテラン。中川町では自分の間は農業と家事だけでやるつもりだったが、町の人からぜひ開院してくれと頼まれるようになり、ボランティアのつもりで、と昨年鍼灸院をオープンした。

何時か役立てたいと玄関脇に用意しておいた診療室が早速にぎわいを見せた。

「みんな無理して働いているんでしょか。バリバリで、大阪で一年間で使つたモグサがここでは一カ月しかもた



ないんです。20代、30代という若い人が元気に仕事をつづけたいからと通院してくるケースが多いんです。北海道は保険が効かないので、できるだけ安く、時間もたっぷりとって治療に当たるようにしています。おかげで、地元の人達とも交流が深まり、我が家の食費代位稼げるようになりました」と雅子さんは言う。

ご主人の趣味は、目下アンモナイト。取材にお伺いした日は日曜日ということ、午前中から仲間と山へ化石採集に出かけていた。

「このあたりには沢山出るので、それを売って小遣い稼ぎをしている人もいます。私はあちこちの山や川を歩いて地理を学ぶことと、採集したもので分布図を作ったり、研ぎ上げて親しい人にあげるんです」といって、私にも素晴らしいペンダントを一つプレゼントしてくれた。

広々とした贅沢なリビングルーム。その一角にはご主人の手作りの木工品やアンモナイト入りのマグなどがあるところせましく並んでいる。

高校一年生になった堅吾君も二階から下りてきてくれて記念撮影。こちらの質問に、キッパリ、

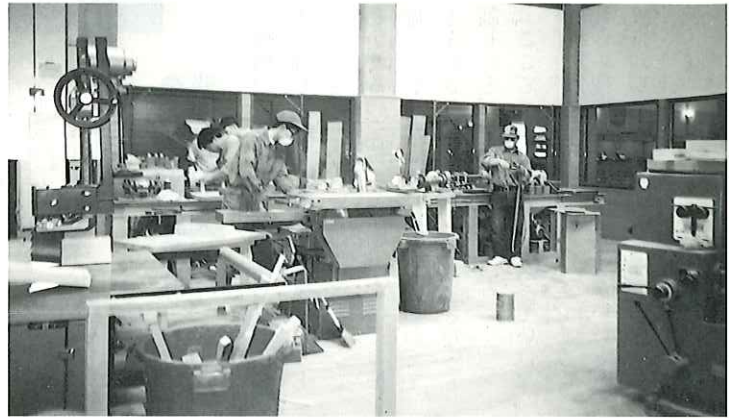
「はい、僕は父を手伝って農業をやりま

す。この町も好きです」と答えた。

窓からは爽やかな緑の風。そんな雰囲気

をそのまま感じさせてくれるスアキ

一家だった。



●オケクラフト森林工芸館とは

エゾ松、トド松が白くて軽い木肌のやさしい食器に変身。オケクラフトは、置戸の基本素材を見直す中から昭和58年に誕生した。

それまで木工芸品には向かないといわれていた針葉樹を特殊加工することで丈夫で美しい木目が誕生。また、器食器としての木工品の見直しと新しいセンスの導入などが専門家たちの協力を得て積極的に行なわれた。

それと同時に、高度加工技術と知識を蓄積した人材を養成するため、昭和



「白い器・オケクラフト工房」 「ウッドワーク・サトウ」佐藤純一さん(北海道置戸町)

佐藤純一さんを、置戸町勝山地区に訪ねた。

●父親の製材所を 新しいかたちで後継

見渡す限りの広々とした畑作地帯（置戸はタマネギの名産地としても知られる）と、その背後には緑色濃い森。佐藤さんの工房がある勝山地区は駅前中心部から車で約10分ほどのところにあり、最近では山村留学で3世帯が入村しているというのどかな集落。

佐藤純一さん(46歳)は東京の大学を出るとそのまま東京の商社に就職したが、長男であることから家業の製材所を継ぐため、31歳の時帰郷した。

東京で知り合っ結婚した奥さんも北海道出身、夫妻には高、中学生の息子さんが二人いる。

「長男だからUターンしなければい

うより、親父と一緒に仕事をしてみた

いと思っただんですね。木材や森につ

いて親から学ぶ一方で、私自身は木工

品作りをやりたいたと、農協の空倉庫

を借りて工場に改築、機器類を購入し





そんな時、町からクラフトセンターを作るので研修しないかと誘いがあり一期生として学ぶことになりました。秋岡先生（工業デザイナー）から、従来の木工品加工とは全く異なる技術やセンスを学んだ、あれはショックでした。

従来は木材として価値の少なかったトド松、エゾ松が白い美しい器になる。軽くて匂いがないので、陶器に代る食器として使えるんです。

佐藤さんの経営するウッドワーク・サトウでは、現在森林工芸館に出品する創作クラフト用品を全体の25%、残りを割箸等の製作に当てている。

独立工房ごとに特色を持たせているため、佐藤さんの工房では、どちらかというと実用性のある皿関係の製作が中心。割箸は、料理店が使う高級品でこれも森林工芸館で販売している。

従業員が10名ほどいるので、創作活動と売るための木工品作りとのギャップを常に考慮していく必要があるのだろう。

工場内を見学させてもらったが、木材を長い間寝かせて自然乾燥し、用途に合わせて切斷、木工ろくろ、その後回数にわたって成型塗装を施すなど、一つの製品が誕生するのに大変手間がかかることを痛感した。従業員の大半

は地元の女性たち。みなこの道10年以上のベテランで、機械を上手に使いながら作業する様子に感心し、箸一膳使う時も、これらの人々に感謝しなくちやと思つたものである。

●「一度都会へ出た方がいい」

佐藤さんは、Uターンについて、「若い時は一度町を出て、都会で学んだり働いてきた方がいいんです。多分私の息子達も高校を出ると同時に都会へ行くでしょう。」

都会や別の地域で学び社会勉強してまた帰ってくるのが理想ですが、彼らを受け入れる就職の場はまだ少ない

いのが現状で、「帰ってこい」とも言えないのが辛いところですね。

置戸町の場合は、クラフトセンターで研修する若者も多くなり、現在では木工品以外の素材を生かした製品開発にも力を入れています。森林産業の総合的な振興につながってほしいと願っています」と佐藤さんは語る。

置戸町の有名なイベント、「人間ばん馬祭」や「山神太鼓」「バチ曳き合戦」等は、佐藤さん達が企画して実施、いまは若い世代に引き継がれ、北海道を代表するイベントとして人気を博している。●オケクラフトセンター 森林工芸館 ☎0157・523170

「何とかなるさ」の精神で陽気にUターン

岡田正勝さん一家（鳥根県弥栄村）

「広い家に住みたい」—— たったそれだけの理由で、見たことも行ったこともない山陰の小さな村にUターンした家族がいる。

東京生まれの夫妻にとって、田舎暮らしは生まれて初めて。「何とかなるだろう」の楽天的精神で、家族6人の全く未知なる田舎暮らしが始まった。

岡田正勝さん（30歳）一家が東京から鳥根県弥栄村に移ってきたのは平成

4年3月。一家は正勝さんを筆頭に、妻の百代さん（27歳）、長女の真佐子ちゃん（8歳）、次女の千鶴ちゃん（4歳）、長男卓也くん（2歳）という5人家族だった。現在はもう一人生まれ、7カ月の朋之ちゃん（加わり6人家族）になった。

岡田さん一家がそれまでの都会の暮らしにあっさりとは見切りをつけ、この遙か山陰のどかな村に移ってきたの

は、実にシンプルで明快な理由からだつた。

「もっと広い家に住みたい」と切実に願っていた妻・百代さんが、ある時見かけた新聞記事。それは鳥根県弥栄村の村外者受け入れ事業の記事で、家付きの100坪の土地が、弥栄村に25年間定住するという条件でもらえるというものだった。

百代さんは迷うことなくこの記事に

とびついた。早速電話で申し込み、ご主人の正勝さんには事後報告という緊急手段をとった。その位、百代さんにとっては「家つき100坪」の土地というのは魅力的だった。

ご主人の正勝さんは27歳の時、すでに運送業で独立。収入もそこそこ安定しており、家が狭いことを除けばさして不満もない生活だったという。

田園風景の中に広がる ゆとりの5LDK

とまどうご主人のもとへ、やがて弥栄村から一通の通知が届いた。それは村の出したいくつかの条件をすべてクリアした岡田さん一家に対する、村からの正式な受け入れ通知だった。

村の出した条件とは夫婦ともに40歳以下で子供がいて、老人のいないこと。現在の年収が100万円以上あり、弥栄村に25年以上住めること、というものだった。村からの通知を受けて、岡田さん夫妻は初めて村の下見に出かけた。

島根県弥栄村は県の南西部、日本海にほど近い静かな山あいの村だ。目指す家は国道から田畑の広がる田園地帯に入った小高い一角。裏山を背に、広い敷地にゆったりと建つ立派な家だ。5LDK。東京でこれだけの家を持つには一体何十年かかるだろうか。

緑あふれる素晴らしい環境と提供される家の広さに、夫妻は否も応もなく結論を出した。子供たちもきつと喜ぶにちがいない。

仕事は「運送業ならどこでもやれるだろう」と、楽天的に前向きに考えることにして移住を決意した。

村の文化や風習の違いに カルチャーショック

弥栄村に住んですでに2年という岡田さん一家を訪ねた。生後7カ月の朋之ちゃんを抱えた岡田さん一家は、犬3匹と猫2匹も加わって楽しく賑やかな暮らしぶり。

「隣に気がねすることもないから、子供たちのびのびとおおらかに育ってくれています」と百代さんがいう。

この広さなら6人家族がゆったり暮らせる贅沢なほどの空間だ。

ご主人の正勝さんはこの村に移って、早速、少し離れた浜田市の運送店に就職。現在はより条件のいい配達の仕事に就き、張り切っている。収入は埼玉県にいた頃に比べ半減したが、その分これだけ快適な住まいを手に入れた訳だから文句は言えないと、正勝さんは考えている。

収入は減っても物価が安いのではないかと百代さんに訊くと、

「それでもないんですよ」と渋い声。「農協のスーパーがあるんですけど、

東京のように安売りはしないし、商品の数も少ないんです。物価は東京の方が安いんじゃないかしら。それにクルマがないとこの辺りは動きがとれないんで、ガソリン代も馬鹿にならないんですよ。私はクルマの免許がないんで、昼間ちよつと出かけるにもバスに乗るんですけど、バス代が片道1,000円かかるんです」

都会の暮らしでは想像の出来なかった意外な出費は他にもあった。

「この集落には『常会』という会合がしょつ中あって、又の名を『集金常会』というんですが、人が死んだり、結婚したりと、何かにつけて自治会がらみの出費が重むんですよ。ウチはまだ子供が小さいからいいんですけど、近所で葬式などがあると、夫婦揃って手伝いに出なければいけないですし」と、都会とは違つたさまざまな風習に驚くことばかり。

公立小学校に制服があり、制服代がかかる、子供はヘルメットをかぶって自転車に乗らなくてはいけない、等々。慣れないうちはこうした事が窮屈に感じられた。

しかし、近所のお年寄りたちが暖かく子供を見守ってくれたり、食べきれないほどの野菜を届けてくれたりと、田舎ならではの人情の暖かさや居心地の良さも沢山経験した。

今ではこれが村の暮らしなのだと思

岡田さん一家が住む住宅



解てきるようになってきた。正勝さんも真面目で温厚な人柄が買われて、職場にも村にも溶け込んでいる。

弥栄村は毎年5家族の村外者を受け入れているが、彼らが村の生活に溶け込むまでには、それぞれに時間や歳月がかかることだろう。あせらずにゆつくりと互いを受け入れていくことが、今は大切なかもしれない。爽やかな新風が村を吹き抜ける日も遠くないことだろう。

(金山淑子)

老人ホームでお年寄りの介護を手伝う
(ソーシャルサービス制度)



**ボランティア活動を人事評価に反映
適用者は4000人に**

富士ゼロックス(本社・東京)で、「ニューワークウェイ(NEW WORK WAY)」と呼ばれる社内経営刷新運動がスタートしたのは、88年2月のことである。同じ年、この運動は「特別加点点評価制度」というユニークな人事評価制度として結実している。

この運動の背景について、社会貢献推進部長の堀越秀憲氏は、「80年代は、企業のあり方が厳しく問われた時代だった。対外的にはジ

企業と地域の 新しい関係を求めて 富士ゼロックスの社会貢献活動

社会貢献推進部長堀越氏



このコンセプトに沿った実際の成果を、具体的な人事評価の形に置き換えたのが、特別加点点評価制度である。

堀越氏は、「人事評価といっても減点方式ではなく、具体的には次の2つのケースについて、プラスの評価を与えるものだ」と、話す。すなわち、①自分で立てた1年

間の業務計画を自己評価し、それを会社側の期待値と突き合わせて評価する、②ボランティアなどの業務以外の社会貢献活動について評価する、の2つである。

このうち、企業として後者の評価に積極的に踏み込んだ点は、特筆に値する。これまでにない、地域と企業との新しい関係を予感させるからだ。ちなみに、評価の処遇は、年2回のボーナス支給時に、給料の本給の10%を加算して支給される。昇進、昇格には一切無関係である。

堀越氏によれば、制度発足後6年、これまでの適用者数は年平均8000人、合計で約4000人にも達するという。会社員の合計が約15000人、つまり、これまでに約4分の1の社員が、いずれかの評価を受けたことになる。これは、無視できない数字だ。

堀内氏は、「これまで、企業は自分たちの都合のいい尺度でしか世の中を見てこなかった。当然あるべきもう一つの社会性がないがしろにされてきた。今後も、あせらずにやっていきたい」と、意欲を燃やしている。

ヤパンバッシング、対内的にはゆとり、時短といった労働観の変化があり、21世紀へ向けた新しい企業風土づくりが急務となっていた」と、説明する。

ニューワークウェイで、このパラダイム転換のキーワードとなったのが、「個の尊重」と「創造性」である。これは、従来の生産性と効率性を至上とする画一的な考え方の反省に立って、個人の独創性を重視し、そこから多様な可能性を引き出そうという試みである。

まさに、「いかに(HOW)作るか」から「何を(WHAT)作るか」への、ドラスティックな発想の転換を意味していた。

ソーシャルサービス制度、家族介護 休職制度など13の新制度

さらに、堀内氏が部長を務める社会貢献推進部が発足した90年、この特別加算評価制度を大幅に強化・拡大した画期的な制度が次々とスタートを切っている。テーマ休暇制度、リフレッシュ休暇制度、ソーシャルサービス制度、教育休暇制度、家族介護休職制度など



の育児休職は88年に導入。88年以降に新制度は実に13にもおよぶ。

このうち、全国初と言われるソーシャルサービス制度は、その内容、規模ともに、富士ゼロックスのヒット作である。この制度について堀越氏は、

「わが社には、NX||TQC+NWWで示される理想があります。NXとは、ニューゼロックス運動のことで、わが社のトータルな理想、目標を表してします。TQCとは、トータル・クオリティ・コントロールのことで、いわば従来からある業務の形態です。これだけではダメだということで、NWW、つまりニューワークウェイが始まったわけです。ソーシャルサービス制度は、NWWのなかでも横綱級の制度として、NX運動を大きく前進させる牽引力になるはず」と説明する。

ソーシャルサービス制度は、社員が国や地方自治体などの社会福祉機関で社会奉仕活動をする場合に、会社が全面的にバックアップするという制度である。当面は、老人介護、心身障害者介護、児童介護、青年海外協力隊などが対象となるが、今後は文化活動などにも対象を拡大する予定もあるという。

会社のバックアップ体制は、①休職期間は6か月以上2年以内、②援助金として、賃金と標準賞与額を支払う、③人事上の取り扱い、休職期間を勤続年数に算入し、昇給は標準考課者に準ずる、という内容だ。何やら夢のような話だが、これには条件があって、勤務3年以上の社員で、年に1回行う論文・面接審査に合格した5名程度となっている。

現在までのところ、適用者は91年度以降93年度まで各4人、93年度は3人という数字が上がっている。適用行為も、ほぼ均等に分散している。特別加算評価制度のようなマスの威力には欠けるものの、密度は十分ありそうだ。案外、社会的なインパクトは、この方が大きいかも知れない。

堀越氏は、「応募してくる人は、きちんとした考えを持った人ばかり。この制度のために入社を希望するという人がいても、それはそれでいいのではないか」との考えだ。

トップの考え方が 問われる時代

ところで、堀越氏は、実は富士ゼロックスの生き抜きではないという。

やや照れた様子で、堀越氏が言う。「1970年、大阪万博の年まで電通において、テレビCMを制作していました。その年に富士ゼロックスへ移り、宣伝課長になったんです。経験を生かせということだったんですよ。宣伝課長になって、初めて手がけた富士のCMが、『モーレッツからビューティフルへ』というビューティフルキャンペーンだったんですが、覚えていませんか」

実は、この「モーレッツからビューティフル」のビューティフルキャンペーンは、戦後のCM史にその名を残す大ヒット作である。このCMは、ソニーの成長神話に匹敵するほどの大成長を富士ゼロックスにもたらしたと言われている。堀越氏は、いわば富士ゼロックス



の陰の立役者だった。NWWの成功の裏には、堀越氏のこんな柔軟な発想が息づいていたわけである。

NWWについて、堀越氏はこんなことも言っている。これは、堀越氏の営業所時代の経験である。

「NWWに拒否反応を起こす人は、だいたいわいこんな文句を言うもんですよ。そんなものは子供だましだ。一線の現場には、そんなヒマはない」と。が、私の経験では、これは間違いない。成績がいい人ほど、仕事の要領もよく、意外に時間を持っているものです」

また、堀越氏は、「こういう大胆な社内改革を断行するには、やはりトップのリーダーシップが重要だ」と、指摘する。

「当社のような休職・休暇制度を適用している会社は、現在、全国で30社余りだと聞いています。これは、将来に対するビジョンが明確でない経営者がいかに多いかということの証でもあります。その意味では、わが社は会長、社長はじめ、経営陣に恵まれています」

富士ゼロックスは、93年7月、財団法人余暇開発センターが実施した「企業ゆとり度診断」で、通産省の産業政策局長賞を受賞して

いる。また、6年連続、同優良企業賞にも輝いた。「企業ゆとり度診断」は、労働時間や休日・休暇制度を中心とした労働条件（ゆとり度）によって、企業を評価しようというものだ。この審査では、実際に制度が活用されているかも厳しくチェックしている。

この点は重要で、いくら制度を整備しても、実際に使うことができないれば意味がない。名だたる企業のなかにも、こういうケースがかなりあるという。

「端数倶楽部」「拡大教科書」 社員の福祉風土の中で

これまで、骨格となる大きな制度ばかりを紹介してきたが、富士ゼロックスには、小さくともキラリと光るユニークな制度も数多くある。そんななかで、堀越氏の自慢というのが、「端数倶楽部」と「拡大教科書」だ。

「端数倶楽部」は91年12月にスタートした制度で、毎月の給料とボーナスの端数（100円未満）に各自の自由な意志（100円×n）をプラスしたものを、「富士ゼロックス端数倶楽部」の口座にプールし、社会福祉や環境保護などに役立てようというものだ。もちろん、入退会も金額も自由。現在、会員は2700名、年間約1400万円集まるといふ。

堀越氏は、「昨年、この一部を使って、フイリピンのピナツポに近いある町に井戸を寄付しました。17人が現地まで行って、井戸掘りもしました。来年は自分に行かせてくれ、という人もいます。こうした状況が、だんだん

社内内で受け入れられやすくなっていくのは、いい傾向です」と、頷を緩める。

もう一方の「拡大教科書」は、これまたユニークなものだ。これは、弱視の子供たちのために、カラー複写機で教科書のなかのイラストやチャートを拡大して提供しようという構想である。もちろん、無料。全国のどこの営業所でも受けつける。文部省でも、弱視者用の拡大教科書を提供しているが、種類しかなく、全部には行き渡らないのが現状だ。

「考えて見れば、わが社のカラー複写機の技術は、ハンディのある人ほど役に立つ商品だったのです。いままでは売ることができていたのですが、ハッと気づかされました。全国の営業所というシチュエーションもおもしろい。営業の第一線の連中が、そうした子供たちと関わりを持つ意味は非常に大きいと思いますよ」と、堀越氏。

バブルのカネ余りの時代には、企業メセナが大流行した。しかし、バブルの崩壊とともに、それらは立ち消えになってしまった。企業が役立つとはどういうことか。技術が本場に生かされるとはどういうことか。この拡大教科書のケースは、企業が社会貢献をどのレベルで考えるのかということについて、深い示唆を与えている。

堀越氏は、「5年、あるいは10年経って、社員の行動様式がどう変化したのか。会社はどう社会に開かれたのか。長い目で見つけていく必要がある」と、言っている。

（森省歩）



私たちは北の輝く星



手づくり演劇

「カシオヘア座」



上3枚／「茂谷の山・鼻曲り物語」(2幕8場)。むがし一戸に女人禁制の茂谷の山があったという話をテーマに。



→「九戸の胡桃くるみめぐり愛」(2幕13場)。村を出たい若者に、村の魅力を伝説を通して語る。カシオペア座長三沢芳光さん。二戸市で歯科医を経営している。



演

劇活動を通して、二戸地区広域市町村圏内の交流、活性化、明日を考える場にしたと結成された劇団カシオペア座(三沢芳光座長)は、平成3年11月24日のカシオペア連邦建国祭に『五つの灯』を上演したのを皮切りに、5年1月には一戸町で『茂谷の山・鼻曲り物語』、同年11月14日には九戸村で『九戸の胡桃めぐり愛』を上演してきた。

5市町村の人が力を合わせることで難問を解決していくというのが基本テーマで、キャスト、スタッフともすべて素人、地域ぐるみの手づくりをめざす。

九戸村公演の『九戸の胡桃めぐり愛』は、脚本だけは全国から公募したが、スタッフの

食事の世話、入場者にクッキーの「菓子を食べア」をプレゼントする主婦グループの協力もあって、総勢180人が参加、開演2時間前から行列をつくった観客は1000名に達した。

カシオペア座の公演は、今後、軽米町・浄法寺町・二戸市と毎年舞台を移して、その地域の人々をメインスタッフにしながら公演されていく。すでに今秋公演に向けて、脚本づくりがはじまった。

カ

シオペア連邦とは、岩手県二戸地区広域市町村圏を象徴する名称。浄法寺町、一戸町、二戸市、九戸村、軽米町の5市町村

の中心を線で結ぶと「W」になる。北の夜空に燦然と輝くカシオペア座。それは人口減、若者の流出、産業の停滞に悩む二戸地方にとって、一つの夢であり、「輝く」ための目標である。

二戸地方振興局は、かねてより広域振興ビジョンを提案してきたが、それを「カシオペア構想」としてふくらませ、地域イメージを高めるよう、住んでいる人々が皆で力を合わせていこう、そのためにさまざまな運動を展開していこうと呼びかけた。



↑カシオペア・アカデミー会長中田勇司さん
→地元の高校、中学校の吹奏楽部が音楽を担当した





音響、照明係の皆さん。新しい機器も活用して舞台効果を盛り上げる



一般公募した台本を選定、地域の特徴に合わせて脚色。連日会議となる



衣裳、メイクは女性たちの仕事(キツネに変身していく女性)



大工さんも協力して舞台作り。公演前2日間は徹夜の作業が続く
●写真協力/劇団カシオペア座

現 在アカデミーの会員は100人。その中に「カシオペアラリー」「劇団カシオペア座」「カシオペア百景」「会報」「星のつどい」「川下りチーム」「企画」の7チームがあり、

その頃、同じように東北各市町村の青年団体、青年会に広域ネットワークを呼びかけていた青年たちがいた。当時、二戸青年会議所社会開発委員会の委員長を務めていた中田勇司さん(31歳・石材店経営)。

「二戸を活性化するためのイベントを考える会」の名称を「カシオペア・アカデミー」にかえ、3年7月に「星の集会」を開催。それが事実上の設立総会となった。

5市町村をカシオペア連邦と命名、11月には建国祭を開催しようと決定したが、それからの準備は死にも狂いだったという。

10月20日には5市町村を巡回する「カシオペアラリー」を開催し、またカシオペア連邦のめざすものをアピールするには演劇がいいだろうと建国祭に向けて創作演劇「五つの灯」の公演準備がはじまる。そのプロデュースやディレクターをしたのが三沢芳光さん(41歳・歯科医師)。スタッフも役者もはじめての経験、ほとんどぶつけ本番だったが、観客席からは感動の拍手とすすり泣きがいつまでも続いたという。

なお、建国祭には、すべての家が電気を消し、数分間夜星を眺める、子供たちは学校などに集まってカシオペア座を観察するという行事が全地区でほぼ定着してきている。

劇団カシオペア座は、一過性のイベントに終らせたくないという声が高まって、正式には平成4年4月に誕生した。

講演会や勉強会も熱心に開かれている。

カシオペア座のメンバーは約20人だが、一つの芝居が決まると、公演に向けて、大道具、小道具、照明、化粧、衣裳、美術、舞台、宣伝、時代考証などの係が集められ、また子供から老人まで、役者集めに奔走する。スタッフ、キャスト共手弁当。県から助成金が少し出るが舞台や照明機器代、パンフレット印刷代など、一回の公演に500万円はかかるため、企業や商店をまわって寄附金集めをするのも三沢座長らの大切な仕事である。

「せめて5地区を公演し終るまでは頑張らなくちゃと思います。そのうちに若い人がバトンタッチしてくれるでしょう。夢は、照明機器のあるホールが欲しいですね。」

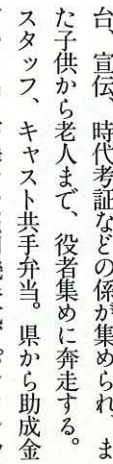
と三沢さんは語っていた。

青年たちのリーダーとして人気がある中田さんの家は代々続く石材店。いまは経営もまかされているので忙しいが、夜はアカデミーのことで毎晩のようにとびまわっている。

東京からのUターン組の一人で、彼の都会的センスや行動力が、イベント企画にも充分生かされているようだ。

（浅井登美子）

「菓子をペア」でカシオペア。お田さん手作りのクッキーを無料配布した



「菓子をペア」でカシオペア。お田さん手作りのクッキーを無料配布した



Uターン、Iターン相談窓口一覧

県名	窓口名称	東京事務所	*は県事務所のみ	その他の窓口所在都市
北海道	「住まいる・北海道」促進センター	東京交通会館(有楽町)6F	☎03-3217-0641	札幌、名古屋、大阪
青森	あおもりUターンセンター	住友生命八重州ビル5F	☎03-3271-0700	青森、八戸、弘前
岩手	岩手県Uターンセンター	岩手県東京事務所内	☎03-3581-0341	札幌、名古屋、大阪
宮城	ふるさと宮城人材ネットワーク 東京情報センター	都道府県会館別館8F	☎03-3263-2851	仙台(人材銀行内)
秋田	Aターンプラザ秋田	東京交通会館11F	☎0120-122255(フリーダイヤル)	札幌、大阪
山形	山形県ふるさと就職情報センター	都道府県会館本館2F	☎03-3265-5931	札幌、名古屋、大阪
福島	ふるさと福島就職情報センター	ふくしま会館(上野)	☎03-3834-6230	福島、郡山、平、会津若松
茨城	いばらぎ雇用情報コーナー	国際観光会館3F	☎03-3231-1839	水戸(県教育会館内)
栃木	とちぎ雇用情報コーナー	〃 2F	☎03-3215-4068	
群馬	ぐんまUターンコーナー	〃 4F	☎03-3231-4836	
新潟	にいがたUターン情報センター	都道府県会館別館7F	☎03-5276-5826	新潟
山梨	ふるさと山梨就職相談室	国際観光会館1F	☎03-3216-2630	甲府、大阪
長野	東京Iターン相談室	〃 4F	☎03-3211-1335	名古屋、大阪
岐阜	ぎふ東京Uターンコーナー	都道府県会館別館4F	☎03-5275-3225	岐阜、大阪、大垣、多治見、高山他
静岡	静岡Uターン就職情報センター	国際観光会館4F	☎03-3215-0612	静岡、沼津、浜松
愛知	あいちUターン情報コーナー	東京交通会館11F	☎03-3217-8609	名古屋(県庁内)
三重	マイライフ三重人材Uターンセンター	鉄道会館(丸の内)9F	☎03-3211-2737	津(県民サービスセンター)
富山	富山県東京Uターン情報センター	国際観光会館1F	☎03-3287-1355	札幌、名古屋、大阪
石川	東京Uターン相談室	都道府県会館別館5F	☎03-3263-1631	名古屋、大阪
福井	福井Uターンセンター	国際観光会館4F	☎03-3201-4668	福井、大阪
滋賀	技術人材Uターン情報コーナー	都道府県会館別館8F	☎03-3263-6861	大津(滋賀会館)
京都	京都Uターンセンター	*京都(上京区・ハロワーク)	☎075-441-8191	福知山、綾部、舞鶴、峰山、宮津
兵庫	兵庫県Uターンバンク	*神戸(中央区・県中央労働センター)	☎078-341-2532	豊岡、八鹿、柏原、西陣、洲本
奈良		*奈良県商工労働部(県庁)	☎0742-22-1101	
和歌山	きのくに人材Uターンセンター	都道府県会館204	☎03-3265-1031	大阪、和歌山、新宮、田辺他
鳥取	ふるさと鳥取Uターンコーナー	都道府県会館本館4F	☎03-3263-6754	大阪、鳥取
島根	東京ふるさと雇用情報コーナー	大丸百貨店(東京駅)9F	☎03-3213-9550	大阪、広島、北九州
岡山	東京Uターン相談コーナー	国際観光会館2F	☎03-3211-5767	大阪、岡山
広島	東京ふるさと就職情報コーナー	〃 4F	☎03-3215-5010	大阪、広島
山口	東京Uターン相談コーナー	〃 3F	☎03-3231-1863	大阪、山口
徳島	徳島Uターンコーナー	都道府県会館6F	☎03-3264-7636	名古屋、大阪、徳島
香川	東京人材Uターンコーナー	国際観光会館2F	☎03-3231-4840	大阪、高松
愛媛	Uターン情報コーナー	都道府県会館6F	☎03-3261-7062	大阪、松山
高知	高知県東京事務所	大丸百貨店9F	☎0120-103248(フリーダイヤル)	大阪、高知
福岡	ふる里人材Uターンコーナー	福岡県東京事務所(麹町)	☎03-3261-9861	名古屋、大阪、福岡
佐賀	佐賀県東京事務所	都道府県会館別館4F	☎03-3264-4221	名古屋、大阪、佐賀
長崎	長崎県東京事務所	〃 本館2F	☎03-3263-4851	大阪
熊本	東京熊本館	銀座熊本館	☎03-3572-5022	名古屋、大阪、熊本
大分	豊の国Uターンコーナー	尚友会館内(霞ヶ関)	☎03-3501-0261	名古屋、大阪、大分
宮崎	ふるさと宮崎就職相談窓口	都道府県会館別館5F	☎03-3265-5951	名古屋、大阪、宮崎
鹿児島	ふるさと人材相談室	〃 7F	☎03-3263-1821	名古屋、大阪、鹿児島
沖縄	沖縄県東京事務所	〃 6F	☎03-3265-7001	名古屋、大阪

(注)都道府県会館/千代田区平河町(地下鉄永田町下車) 国際観光会館/千代田区丸の内(東京駅八重州北口前) 東京交通会館/千代田区有楽町(JR有楽町駅中央口)

でぼら
No.7('94年秋冬号)
発行日/平成6年9月15日
発行所/全国過疎地域活性化連盟
〒105 東京都港区虎ノ門1-1-24
オカモトヤビル8階 ☎03(3580)3070(代)

編集協力・印刷/榊ぎょうせい
■協力/(財)地域活性化センター

全国過疎問題 シンポジウム開催 (高知市)

テーマ||新しいなか創造
10月17日(月)基調講演「DPOの時代」
星野進保(総合研究所開発機構所長)
18日(火)第1分科会
「地域を創るー運動つくり」
第2分科会
「交流ネットワーク
ーにぎわいつくり」
第3分科会
「政と民間のパートナーシップ」の
第3セクターー富山の」

■過疎地域活性化ビデオ
「たおやかな矜持」
ー歴史・文化を活力にー
VHS 30分完成
熊本県泉村・宮城県登米町・和歌山
県日高・有田広域圏の歴史・文化を
活かしたまちづくりを紹介。


許さん。


宝くじの収入は、
宝くじの収入は、
宝くじの収入は、



お父さんの密かなアソビは、宝くじ。
どうせ当たらないとか、
買うだけムダだとか言いたくなくても、
宝くじぐらいなら、まあ許してあげましょうよ。

(本誌は、財団法人日本宝くじ協会)
(の助成を受けて作成したものです。)

 宝くじの収益金は、
公共事業に役立っています。

 財団法人 日本宝くじ協会